



目次

| | |
|-------------------------|-----------|
| 法華經要文講義(續)..... | 本多日生 |
| 那先比丘經通解(續)..... | 本多日生 |
| 記事報道..... | 吉田昂生 |
| 淨土教と厭世思想..... | 森川日修 |
| 我國民性と日蓮主義..... | 武田顯龍 |
| 日蓮主義より見たる無量義經(第三回)..... | 井村日成 |
| 日本文化と外國關係(承前)..... | 文藝博士 本多日生 |
| 華三聖..... | 本多日生 |

第廿六年九月號

北條道松可即山卸侯馬
力島燈子東軍了智所山又



法華三聖

本多日生

と云ふことが、今日の各方面に、我國の文士に如何なる關係を持つてゐるかと云ふことは、思ふに淺薄より居る諸種の弊害の源頭である。この國民の理想目的を高めて、さうして淺薄なる思想に深みを與へ、分裂せる思想に統一を示さぬ限りに於ては、我國の天職を完ふすることは斷じて出来ない、これが根本問題である。

所がこの人心を向上せしめると云ふことは、言葉であらうけれども、どうも今言ふ問題に適當な解決を與ふる者は少ないのである。

て、是は所謂教化の根柢から考へて行かなければならぬ。只人間善くなれ立派になれと云つても、教化の根本を立て、教化の方法を十分に行はれない限り思想の分裂を免かれない、儒教だけやつて佛教は知

多量の亡びないのよ

ない、我が日本國には建國以來そこに標榜せられて居る所の大なる理想があり、之を實現しなければならぬ天職がある。之を實現するに就ては、どうしても國民の思想を健全にし、人格を向上して參らな

亡びる

國の教と、この三つが教化の基本を爲すのである。廣く世界の善良なる思想を吸収すべきは無論であるけれども、兎に角民心教化の根本基準は、先づ東洋文化の健全なるものに取り、之を發揮して行かなければならぬ。私の考へを以てすれば、今日の弊害の根元はこの教化問題に就て方針の確立せない點に

して起つたる惟神教と、
聖人の教と、印度の文藝

あると思ふ、人間の理想と云ふか目的と云ふか、それが次第に低下して、さうして淺薄なる思想が行はれ、それが分裂を來たして居るのである。國民の目的、理想が低くなつて、さうして思想が淺薄に流れ分裂して居ると云ふことが、今日の各方面に物發して居る諸種の弊害の源頭である。この國民の理想目的を高めて、さうして淺薄なる思想に深みを與へ、分裂せる思想に統一を示さぬ限りに於ては、我國の天職を完ふすることは斷じて出來ない、これが根本問題である。

所がこの人心を向上せしめると云ふことは、言葉は簡單であるけれども、最も困難の問題であつて、是は所謂教化の根柢から考へて行かなければならぬ。只人間善くなれ立派になれと云つても、教化の根本を立て、教化の方法を十分に行はれない限り

には、到底救はれないであらうと思ふ。又其の思想の混亂を防ぎ、分裂を防ぐことは、惟神の思想を發揮し聖人の教と佛教の思想を發揮するにありとするも、是が中々容易なことではない。この希望に反對する者はなからう、人間の思想は宏遠に進み行くこと、人格を向上することを希望する。思想は淺薄よりも深遠が宜しい、分裂よりは統一が宜しいと云ふことは賛成するけれども、それが如何にせば出来るかと云ふ實際問題に入つて、之を明示する者がない。澤山な思想家があり、教化的の愛國者がある譯であらうけれども、どうも今言ふ問題に適當な解決を與ふる者は少ないのである。

先づ日本の歴史に就て考へて見れば、徳川時代に澤山な——儒者や神官が出たけれども夫等の人は、思想の分裂を免かれない、儒教だけやつて佛教は知

らなくとも宜しいとか、神道だけやれば佛教など知らなくとも宜いと云ふ、何處に能く儒者にして佛教も味ひ、惟神の教も味ひ、神官にしても佛教を味ひ、

流が、どうして文化統一の目的を果すことが出来るものか、到底今日及び將來の指導に堪え得るものではない。

儒教も味はつて、そこに統一あり深みある思想を有せし思想家があるか、無いではないか、随つて淺薄を免れない譯である。古い時代にしても大して名を擧げる程の人は居らないのである。これを足利時代に求め、鎌倉時代に求むる時を代表者としたら宜いか。それでは平安朝時代にどれほどの人が居たか、奈良朝時代にどれほどの人が居たか。嚴密に調査した時に於ては、我國に於て佛教を學ばないやうな人とは統一深遠の思想家は居らぬ。今私の言ふ思想の深みを持つてさうして有ゆる方面の思想を統一するやうな學者は一人も居らぬ。我國文化の一要素たる佛教さへ味ふことをしないやうな偏見者

所が此の三聖は傑出して居たのであつて、今更説明を要しない程である、聖德太子は非常な綜合學派であり、さうして深遠なる教化を垂られた人である。聖德太子一代の事業は誠に明瞭であります、十七憲法に依りて證明しても分る事であり、十七憲法發布の時はこの儒佛神の三つのものに就て、一を學んで他の二つを斥けるやうな者は學者でない、それは學却つて邪と成ると云うて、邪しまなものである、馬鹿者であると云ふことを非常に強く書いてある、口を極めて攻撃されて居るのである。この佛教、神道、儒教、の三教を併せて研究し、さうして各々特色を發揮すると同時に之を融合しないや

うな者はそんな者は邪人である、馬鹿者であると明言せられた。斯く聖德太子は思想に於ては綜合の方から意見を樹てられたのであります。三教融合と云ふ、無理に違つたものを合せるやうに聞ゆるけれども、三教合せなければ精神教化の充全なる効果を奏することは出来ないものである。是は深く考量すれば分るのである。例へば真理の研究から考へ、或は道德の見地から考へ、又宗教の必要から考へるならば、この哲學と云ひ、道德と云ひ、宗教と云ふが如きことは、人心教化上に於て一も廢し得べきものではない。その哲學なら哲學と云ふ事から考へて行つた時に於ては、佛教を斥けたならば、そこに哲學の理智が完成されない、又宗教と云ふ方から言つたならば、儒教や神道のみに依つては足りないことも明らかである。今は世界共通を稱へて居るが、これ

は空間的に横に云うて居るのだけれども、時間的に我國歴史の古今の思想を結合することも忘れてはならぬ、所が儒教の方のみ學んだ人は、どうしても佛教を容れる者が起らぬ、量見が狭い。それだから儒教だけやつた者は、朱子學派でも、徂徠學派でも、仁齋でも、羅山でも、排佛家ならざるはない。それはどう云ふものか、それは即ち儒教の思想が狹隘なる證據である。又神道をやつても狭くなる、餘程氣を付けぬと固陋な頭になり易い、そこを注意しなければならぬ神道は十派の學派に分類せられるけれども、佛教を併合し得ない神道家の説は固陋なものである。今日でも神官に佛教はどうだと聴けば、佛教は異端の教だと云つて悪口を言ふ位のとであらう。さて聖德太子が思想の深みと綜合方針を何處から得られたかと云ふと、法華經を愛讀し法華經に親炙

し給ひしが故である。法華經は開顯の教であり、統一の教であり、而してそこに哲學があり、道德があり、完全なる宗教がある、教化の眞の淵源をなし、一切の思想を綜合統一するものは實に法華經である。此の事は聖德太子が佛教を採用せらるゝに當り分明にお考へになつたのである。聖德太子は迷信的に佛教を迎へられたものでもなく、厭世的悲觀的に迎へたものでもなく、今の所謂文化的の要求から正々堂々と迎へたものであります。この日本の文化を開發する目的の爲めに、佛教を採用せられたので、佛教をどういふ意見で採用せられたか、「輪王の佛典」としてある「轉輪聖王が理想的文化を開發する如く、佛教に依り理想的文化の指導を得んとしたのである。理想の王様が理想の文化を開く方法、その事柄を明かに示したる所のものが佛教であるとし

て採用したのだ、所謂帝王の學として佛教を奉信なさつたのである。それで憲法の中に「篤く三寶を敬へ」と明掲し、「三寶に歸せずんば何を以つてか狂れるを直くせん」と云ひ、天下の人心を教化し、人格を向上せしむるには、佛教に若くはないと斷定せられた。さうして「四姓之終歸萬國之大宗」と云つて、如何なる國民も佛教を奉戴しなければならぬと云ひ、文化的必要から法華經を採用せられて居る。それであるからして法華經の講釋を書かれて居るのを見ると、其初めに、諸法實相の所に於て、「一句萬了の金言」と稱してある、一句萬了の金言とは、諸法實相の一句に於て、萬事を了解し得るとの意で文字は四字であるけれども、一句にして萬了の金言、一切のものはこの文旨に徹底すれば分るとの意である。又道德の事に就ては「萬善同歸之豐田」と云は

れて居るが、今の言葉で云へば有らゆる道德、有らゆる善根が歸趣を同じうして、所謂德並び行はれて替らず、有らゆる善い事が實行されて、さうして法華經の教に歸一する、法華經は一の豐田であつて大根も出來れば人參も出來れば午栗も出來る、何でも出來る、一切の人生に必要な徳化は此教の中より來り又歸趣する、萬善同歸の豐田である。又宗教的に言ふ時には篤敬三寶、憲法にある通りであつて、盡し得て居るものであります、さうして是れ四姓の終歸と云はれて居る。

斯くの如くに綜合的徹底的であつて、實に聖德太子が法華經を尊敬せられた御精神は立派なものであります。この法華經の開顯の理想を基として日本文化の大方針を立てられたのが、聖德太子の遺徳の今日に及よんで光を失はない所以である、初めて佛教

が來た時に、複雜なる七千餘卷の聖典の中から、法華經を擇抜して、御紹介下さつたと云ふことは、國民の忘れてならない文化の大基準である。今でも法華經に來らない人もあるがそれは千三百七十七年遅れて居るのである。日蓮聖人の言葉を借りて云へば、假令どんな良い玉でも、寄つて集つて石ぢや／＼と言へば、凡人は石かと思ふ、汚い石でも是が玉ぢや／＼と皆が言へば、凡人はさうかなと思ふやうなもので、法華經を石のやうに思はした罪は眞に恐るべきであると思はれた。法華經は自力の教で難行ぢや、猫に小判だなどといふ、誠にその迷深い故である。そこで聖德太子の法華經奉戴の思想は、日本文化の全體を導いて行く、基準依據として之を用ゐたふたので、この點に對し私は感謝に堪えない次第であります。この聖德太子の思想が歴代皇室の思召にズツと及んで來て居る。それから國民全體にもズツと及んで來たのであります。



日本文化と外國關係

承前(文實在記者)

文學博士 姉崎 正 治

聖德太子の時代は丁度支那大陸に於て文化の大きな波を打つて來た時であります、その前に中央亞細亞から押寄せて朝鮮と北支那に於て勢力を得、さうして宗教と政治とに依つて北部の人心を纏めやうといふ政策を取り掛つて、朝鮮の方にもその政策が及んで、亞細亞大陸に一種の政治ではありまするが、政治従つて兵力が伴つたのである、併しその兵力よ

りも、亦單に通商よりも、もう少し進んだ意味に於て文化政策に於ける大きな波の起つて居つた時であるのであります、これは印度に於てもその徴候を見ることが出來ます、即ちヒマラヤイツといふ歐洲文化の最も盛んな時であつたのであります、印度から中央亞細亞、北支那に掛けて、文化の運動が潮の如く起つて、それが此島國にまでも押寄せて來たのが、

丁度聖德太子前の時代であります、さうしてその波を受けた、波を受けた爲に日本の國には動搖が起つたのであります、この動搖を捨て、置いたらどうなつたか分らないのであります、一方には頑固黨がある、何でも他國から來たものは悪い、新しいものは間違つて居る、悪いものは皆外來思想だといふ、けれども他國から來たから悪い、内から出來たから善いといふ區別は出來ない、現在でも悪いものを外來思想というて排斥して居る人がありますが、外來思想だから悪い、内來思想だから善いといふ區別は決して何れの世でも付くものではない、今日の世の中でも頑固黨はさういふことを言つて外から來たものは悪い、内から出たものは善いと思つて居るが、内から飛んでもないものが飛出すことは往々あることである、丁度聖德太子の時代に動搖の起つたのはつまりそれであつたのであります、内に於ては貴族が多數あつて各々權力争をして居る、それに植民地

たる朝鮮もまた權力争をして居つた、日本と似たやうなことをやつて居つて、それ等の權勢争ひがいろいろ結び付いて居る、それは内來思想であります、一種の内來思想で、さうして内だけでえらい積りて居る連中、それと今度は佛教を歓迎する方で、どうも外から來たものは善い、亞細亞大陸を経て來たものだから大丈夫で、亞細亞大陸全體が斯うなつて居るのだから、吾々は唯それを迎へさへすれば宜い、つまり他所がやつて居るから俺の方でもやらうてはないか、さういふ連中があつた、これは外來思想だから歓迎するといふ連中、一方の連中は外來思想だからイヤだといひ、一方は外來思想から善だといふので、この兩極端の衝突が起つて、捨て、置いたら、さうしてどちらが勝つてもいけない、頑固黨が勝てばそれで頑固の國になつて、少なくとも文明が遅れるだけでない、その爲に随分ヒドイ目に遭つただ

らうと思ふ、併しその反對黨が勝つたらどうなるか、唯、外から來たものだから結構だ、他所がやるから俺の方もやらうといふ、斯ういふ者に委せて置けば國は滅茶苦茶になつてしまふ、その間に立つて外とか内とか、そんなケチなことを言ふものではない、宇宙の大道は生々流れて已まず、四生之終歸、萬化之極宗、一ツの所に歸するのだ、篤く三寶を敬へ、三寶を敬ふといふのは頭を素ッぽ坊主にして金ピカの佛前に經文を讀めといふ、そんなケチなものではない、それだけではない、それも結構だ、ケチなものでもやらぬよりも結構だが、それだけ行つて居るのでは三寶を敬ふのではない、苟くもこの國があり、この社會があるならば、そこには自然に首領がある、それを造り上げる首領がある、首領と佛と人民と、ともども國の命を造り上げる、そこに三寶がある、それが四生之終歸、萬化之極宗である、國の内外そんな問題ではない、つまり國の外とか内とかいふ

事より以上に立つて、さうして國民を指導し、それだけの理想を以てこの亞細亞大陸に文化の大きな波動の動いて來た時代に處せられたのが聖德太子の事業であつたのであります、即ち唯、外來の思想に應ぜられただけではない、併し勿論それを拒んだだけではない、唯、この國、この國といふこと、この島國といふ有限の國、その國の利害といふ問題だけではない、この國の利害を本にするのではなく、宇宙の大道が第一である、この大道のために吾々が個人としても亦國としても何事が出来るかといふ問題を第一に頭に置かれたから、聖德太子の事業は單り一國を導く上に於てのみならず、天下後世を照し、又佛教の上に於ては亞細亞大陸に反映を與へられたのであります、政治に於ては今申した隋の煬帝に少なくともどれくらゐかの感化を及ぼしたのであるから、支那北部にそれだけの感化を與へられたのである、謂はゞ佛教を外から受入れたやうでありますが、そ

の佛教をこちらで咀嚼しただけでない、我が魂、命として造り上げられたから、その魂命を大陸に又影響を及ぼしたのである、願はくはその當時に於て太子の感化が大陸に及んだのみならず、今後と雖もこの感化の及ぶべきものであらうと思ふ、それを如何にするか、そこは即ち我々自身の責任ある問題だと思ひます。

チョット私一人だけで申して見ませうならば、聖德太子が大阪の四天王寺を建てられた、あの理想に關して、私は一昨年巴里のコレツヂ、フランスでそれを講義しまして、ヤツと昨年書物を出しましたが、それを巴里に居る日本人にその書物を出す前に見せましたが、巴里に居る日本人は其の聖德太子の四天王寺建立に對する理想を知らない人が多い、殆ど皆知らない人ばかりであつた、日本國內に於ても聖德太子の四天王寺建立に現はれて居る理想は、今に私は知らない人が多からうと思ひますが、私は

その事を今申上げると長くなりますからそれも止して置きますが、先づ外國の人が聖德太子を知らないといつて我々愚圖々々言ふけれども、日本人自ら聖德太子の事績に就てはモウ少し研究して見なければならぬと思ふのである。

聖德太子の事に就ては是だけにしまして、傳教大師の時代はこれは唐の文明の最も隆んな時を過ぎ、これから日本には特別に開發をすべき時期に際會して居つた時である、それであるから傳教大師以後日本の佛教のみならず日本の文明が亞細亞大陸並に世界全體として比較的懸離れて開發したといふことは、これは自然の勢であると思ひます、併し惜しい哉、あまり懸離れ過ぎたのでこれも日本の歴史を語る人、日本の鎖國、徳川氏二百五十年の鎖國の事は大體に於ては人が知つて居りますが、モウ少し前に日本に同じく二百五十年の鎖國時代のあつたことを忘れて居る人が多いのである、即ち延喜の朝か

らして平家の時代に至るまで二百五十年間鎖國である、徳川時代の如く厳密な政策の鎖國ではありませぬが、事實上鎖國であつた、その鎖國の魁を爲したのは菅原道真であります、これが善いとも悪いとも私は茲に申しませぬ、善い悪いの問題ではない、時の事情であつたのであります、併しこの二百五十年の鎖國は一面に於て日本が大陸の文明と離れた、所謂獨特のものを開發する餘裕を與へられた、併し又それだけ日本の文明が鈍つた、妙なものになつたといふ結果もある、例へば今日我々の通言「國文」「こそけれ」といふやうな柔かい國文はこの時代に發達した、非常な文學もあります、あれは一種の調子のある國文としての面白味がある、併し如何にもろ／＼だら／＼した調子がある、これは外國と交通して生々した文化の盛んな時代には出来るものでない、二百五十年の鎖國の間に宮廷生活に耽溺し、さうして四六時中詩歌管絃を弄び、時々退窟になる

と法華を讀誦し、朝法華夕念佛をやるやうな悠長な貴族生活の時代に於て、貴族生活を支配した才華のある婦人の造り上げた文明である、この時代の文明では色々ありますが戀歌が盛であつた、坊さんまで皆戀歌をやつた、あまり戀歌が上手で嫌疑を受けた坊さんもある、この頃は歌は作れないが色々な坊さんがあります、斯ういふ文明の出来たのは二百五十年鎖國の結果である、その鎖國の文明の影響として比叡山佛教は非常な禍を受けた、影響を受けた、そこで殆ど小さくなつてしまつたのである、それ故に平家の末に藤原氏の文明が倒れ掛つた際、多少漢學を學んだ人は皆この勢ひを脱して他の方面に活路を求めたのであります、その中で丁度佛教も勢ひいて参つたのであります、禪宗は即ち當時新に興つて來たものであります、宋の文明を受けた當時の一種のハイカラな流行であつたのである、禪宗といふものは今日では寺も少なくなつて衰頹して居るやう

であります、鎌倉時代には上下の渴仰を得て詩文に書いて問答をするといふことは當時の坊さんのみならず武士間にも中々ハイカラであつた、鎌倉武士と云へば武骨一片の荒武者ばかりのやうであるが、中々さうではない、中には餘程のハイカラも多かつた、唯ハイカラといふと輕薄のやうであります、それが藝術並に禪の修行として日本文明のいろいろな方面に影響を與へ、利もあれば害もあつたのであります、これも我々は見えて置かなければならぬ、唯、それが善いとか悪いとかいふ問題ではない利害共に在つたのである。

邸宅と資産を捧げて

日蓮主義宣傳の教會所に

山口縣大津郡三隅村の中村祐吉氏は、同縣萩町の妙蓮寺住職紀野俊耀師の教化によりて、深く日蓮上人の御教を敬慕し、法華經の教旨を信奉する事となつたが、信仰愈々進んで共に、この有難い法悦の心持ちを近隣の人々に頌ち、隨力弘通の微志を果さんと發願し、はては後半生を御佛に献じて、身を墨染の衣に、清き出家沙門の生活に入り、人生の利欲を深く思ひ切つて、其の邸宅は道に捧げて主義宣傳の教會所に充て、其の資産約壹萬八千餘圓の山と田とは教會所の永續資産に當てんと金盡するに至つた。師の上人を訪れて志を語つたが、末法奇特の篤信、元より否やのあらう筈なく、直ちに紀野上人と相携へて東京に本多管長現下に親謁し、此の淨業の裁可を受け、一切の計畫は本誌編輯長團友日斌師の手によりて進行しつゝある。山陽の西端、念佛門徒の牙城長防の野に、新しき本化の大旗の翻るも近き將來であらふと思ふ。



日蓮主義より見たる無量義經 (第三回)

井村 日 威

德行品の概説

今同より本經に就てお断を致さうと思ふが、成るべく不必要な處は省略して、教義上に必要な點丈を要領よくお断致さうと思ふ故に、御經文も全文は掲載致さずして、抄略して引用致さうと思ふ、私の使用の本經は、法華經普及會發行の縮刷法華經に

依る故に、同本に依つて頁數行數を記入致して置きますから、右様御諒承を願ふて置きます。

無量義經德行品第一

無量義經一卷の中、三品に分れて居る、其中の第一は德行品である、此品は三品の中に序分であつて、此品の中には如來の御說法は無いのである、此經を

無量義と名付けた所以は、說法品の中に「無量義は

(二頁二行——同末行)

如是我聞一時佛住王舍城……退一面坐

一法より生ず」と説いて、諸法の根源に一法ありと云ふとを示した、其所生の無量義に隨ふて其經名を附して無量義經と云ふたのである、又十功德品の中の第二功德不思議力を説く中に「一法より百千の義を生じ百千の義の中に一々に復百千萬數を生ず」と説かれたが、同じ意味合である、法華經は統合歸一を主としたが、此經は其反面の演繹的方面を主として説きしが故に、經題に其主とした方面を擧げて、無量義經と名付けたのである、經と云ふは聖教の都名で、釋尊の所説に經の名を付けたのである、菩薩の所説は論と云ふて、經とは言はない、德行と云ふは此品の中に比丘菩薩佛の德行を歎ずるが故に品名と爲たのである、品とは類別、第一とは卷首にあるが故に言ふたのである、以上題號の略釋である。

序分の中に通序列序あり、本節は通序である、一般の經文に通過して置かれてある序分なれば通序と言ふ「如是」とは所聞の法體「我聞」とは能聞の人を擧ぐ、「一時」とは此經所説の時なり、此經は如來成道以來四十餘年の後、將に法華經を説かんとするの時に説かれたのであることは、此經說法品の中に「四十餘年未顯眞實」と言ひ、法華經の序品に「無量義經を説き終つて三昧に入り給ふ」と言へるに徴して、明白なることである、「佛」とは能説の教主、即ち釋迦牟尼佛の金口なるとを示せるなり、佛とは具には佛陀と云ふべきを略したのである、佛陀とは翻譯すれば覺者で覺りたる人と云ふので、吾人の迷者に對するの名である、「住王舍城者闍闍山

中」とは所説の場所、王舎城は中印度の境摩竭提國の寒林城の名で、耆闍崛山と云ふは王舎城の東北にある山で、鷲峰山或は靈鷲山と翻譯して居る、此經に續いて法華經も此處で説かれたのである、「與大比丘衆萬二千人」等より以下は所聞の來て、大比丘衆は聲聞の人、菩薩衆は八萬人、天龍等の非人、比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆、此は普通人類である、並に國王王子國臣國民士國女國大長者等各眷族百千萬數を率ゐて來集したとある、前の方は特に宗教的方面に専門の人々であるが、國王以下は政治家教育家實業家等で、夫等の人々が如來の教を聽聞すべきものであるとを示したので、宗教は宗教家の專有物にあらざることを教示し給ふたのである。

其菩薩名曰文殊師利法王子：八萬人俱

(二、末——二、末)

戒定慧解脫解脫知見之所成就

(二、末——三、初)

本節は第二に能成就の法を明す、法性身を體現することは、戒定慧解脫解脫知見の五分法身の法に依らねばならぬ、戒定慧を三學と云ふて佛法の初門より、佛陀の説き給ふ所て、我等が其非異の行動を戒定慧善法を實行し(戒)、心を一境に安住せしめ思慮を清靜にし(定)、智慧を研磨すること(慧)に於て、迷妄の境界を解脫し得るものであり(解脫)迷妄を解脫したる處に、眞實の智見即ち法性身を見ることを得(解脫知見)るものであるから、此五を五分法身と言ふのである。

其心禪寂常在三昧

有無長短

明現顯白

統

一

日蓮主義より見たる無量義經

是より此品を終るまでを別序とする、此別序の中三段あり、一には菩薩の德行を歎ず、二、聲聞の德行を歎ず、三佛陀の德行を歎ずである、今節は一菩薩の德行を歎ずる中の第一、名を列ね數を唱ふて、文殊師利菩薩等二十九菩薩の名を列ねて居る、八萬人の中の重立つた人達である。

是諸菩薩莫不皆是法身大士

(二、末)

是より下は正しく菩薩の德行を歎ず、中に八、第一に所成就の身を歎ずるなり、是は菩薩の本體を説いたので、法身の居士と云ふは法とは法性と云ふ事で、法身とは法性身である、眞理の全體を其本體として居るものであると云ふのか法身の居士と云ふことである、此は法華經に十界互具を説くも同じ意味で、此菩薩達は實相眞如の妙體であると云ふことを示したのである

(三、一——三、五)

本節は第三に定慧の二徳を歎ず、初に其心禪寂より無量法門悉現在前迄は定徳を歎ず、得大智慧の下は智徳を歎ずるなり。定徳を歎ずる中に又六、一に其心禪寂常在三昧とは不起滅定の徳を明す、三昧即ち禪定に入つて起たざるの徳を歎じた、二に恬安澹泊無爲無欲とは滅定常寂の徳を歎ず、三昧に入るが故に心中の妄想を拭去つて居るから無爲無欲と云ふのである、三に顛倒亂想不復得入とは滅定離倒の徳を歎ず、妄想既に無きが故に顛倒の見を生ずることなきを云ふなり、四に靜寂清澄志玄虛漠とは滅定實相の徳を歎ず、常に禪定に在るが故に散亂の心を生ぜざるが故に靜寂なり、一實に安ずるが故に清澄なり、權果を期せざるが故に志玄なり、心性海に遊ぶが故に虛漠なりで、一切虛妄の境界に心を動

ぜざるを謂ふなり、五に守之不動億百千劫とは守定長劫の徳を歎ず、首楞嚴定を守るを守之と云ふ、此定を起たざるが故に不動と云ふ、一少時にあらざるが故に億百千劫と云ふ、定に入つて動せず長劫の間退かざるを歎ずるなり、六に無量法門悉現在前とは禪に依つて慧を發するの徳を歎ずるなり、宇宙の實相は森羅差別せるが故に無量法門と云ふ、禪を守る徳は遂に宇宙の眞相を理解するに至るを得るなり、故に悉く現在前せりと云ふなり、一に達すれば百千萬種遂に徹底すべきは法の道理の然らしむるところなり。

得大智慧よりは智徳を歎ずるなり、大智慧とは諸佛の權實二智なり、諸佛の權實二智を得て法界の實相を照見するを云ふなり、通達諸法とは十法界の諸法を通達するなり、曉了分別性相眞實とは性相と

が、此に云ふ有無長短明現顯白と云ふのである、此處は吾々の智慧では一寸理解の出来難い處で、經には唯佛與佛乃能究盡と説き、智慧第一の舍利弗尊者すら以信得入非已智分と云はれた事であれば、但一應申上げて置いて、詳しい事は天台大師の御書さに相成つた「玄義」等を御覽に成ると出て居ることてありますからそれに譲つて置きます。



云ふは方便品に説く、如是相如是性、如是體乃至如是本末究竟等の十如是即ち因果の理法を云ふなり、十界の因果關係の錯綜せるを分別し、曉了して其實相を知見するに有無長短明現顯白で、其眞相が分明に理解せらるゝ、有とは三千世間の諸法は其實體は一實相の妙理に外ならぬものであるが、因果の關係に依つて、十界差別の當相に示現して苦樂昇沈の狀態に在る、事實上に苦樂の境界を受けて居るが、其存在を觀察して妙有なりと見る、而も其實體を眞如の妙體なりと見るときは其苦樂の狀態は一に假有に過ぎぬものである事を觀察すると、諸法の體は空なりと云ふことになる、其有と見るも空と見るも唯一面に過ぎぬ、眞實は有空の兩面を具して其中庸を見ねばならぬ、要するに一切諸法は空假中の三面を具有して居るものであると云ふことを眞實に理解するもの

統合宗學林學監 僧正井村日咸述
統一圖總務

日蓮聖人の宗旨

第六版

日蓮聖人御影壹葉三六版七十六頁總ルビ壹部定價金拾五錢也

施本用特價五十部以上拾錢宛

本書は著者が統一圖青年會の爲に口述し雜誌「統一」誌上に連載せられたる日蓮聖人教義綱要の總論を整束したるものにして日蓮主義を最も平易簡明に記述し其要領を會得せしめたるものなり、日蓮聖人降誕第七百年報恩の爲に之を上梓し各方面に頒布したり、暫らく品切の處今同第六版を發行し施本用には特價を以て汎く之を頒賣す、希望の向は左記に御申込を乞ふ。

東京府下雜司ヶ谷

發賣所

本教寺

振替東京五七五四一番



我國國民性と日蓮主義

文學士 武 田 顯 龍

一、緒言

四方の山木木の梢に新緑の芽生えして自然界が冬の陣痛の叫喚から春の新生への歡喜に満ちた時、花は咲き匂ひ鳥は歌ひ蝶は花間に舞ふにつれて、人の心もいと長閑に楽しくなり、軟風肌に適して暢快得も云はれぬ心持ちになることや、又此の期節から夏の夕涼みへかけて痴情に關する犯罪行為の多いことは、氣候が如何に人の行為に影響するか、惹ひて

氣候が、人の行為の學である倫理道德に如何に影響するか、又氣候が如何に人の心に影響するかと云ふことを雄辯に證據だてて居ることと思ふ。更に印度や亞弗利加や又は南洋諸島の土人が色の黒いのや、或は月だとか星とか云ふ天體が地上の砂漠に反映して、天體其自體と空の色彩とが非常に美麗に映れ、亞刺比亞に、天文學が非常に發達したことなどは、風土が如何に學問の上に於て或は形の上に於て人生に影響するかと云ふ事の、侵し得ない左券であ

ると思ふ。或は又氣候溫暖風物華麗な南方の民族が主として潤達愉快的の容貌性質を有つて居るのに反して、氣候寒冷風物陰鬱な北方の民族が主として沈鬱默想的の容貌性質を有つて居ると云ふことは、如何に自然界即ち環境が、人生生活の全體を支配して居るか云ふことを裏書きして居ることと思ふ。

即ち人間は形の上に於て或は精神の上に於て自然の影響を受け、更に自然の支配を受けて居るからして、異なる自然を眺むる人々の間にあつては、自ら人情風俗習慣性質等の上に相異を來たすことは自然の歸結であり、異なる環境に依つて育ぐられたる人々の間に、氣質性格に相異を齎らすことは誠に自然と云はねばならぬ。即ち氣候風土等を異にする我國民が他國民と氣質性格を異にするは當然の結論であらねばならぬ。而して眞に一國の文運を進め國民生活を幸福にするのには其の國民性の長所を助長し其の短所を補ひ是を善導せねばならない。日蓮上人の彼

の國に善かりし法なりとて此國に善かるべしと思ふべからず、法は國を鑑みて弘むべしとの聖語は、斯かる前提の上に於て動かし得ない千古の名言である。而して國民性の長所が那邊に在し、短所が何所に在るかを觀極めることは教化運動に従事する者に取つては、實に緊要の事柄であつて、余は此の點に關し自己の觀る處を述べて併せて日蓮主義と如何なる關係に在るかを述べて見度い。勿論國民性の長所が人間生活の上に、行為として發動して居るものは、其が即ち國民道德の一部であり、短所の其は國民的反道德の一部分であるから、國民性を論ずることは總て國民道德の側面觀であるとも云ひ得られる。

我國國民性に關しては芳賀博士は其の著國民性十論の中に、一、忠君愛國の心強きこと、二、祖先を尊び家名を重んずること、三、現世的實際的なること、四、草木を愛し自然を喜ぶこと、五、樂天洒落なること、六、淡泊瀟灑なること、七、纖麗纖巧なること、八、

清淨潔白なること、九、禮節作法を重んずること、十、温和寛恕なることの、以上十箇條を擧げてあるが、我等は他山の石以て大に賛意を表し大に參考にするに足ると思ふ。が自分は聊か異つた方面を加へて國民性を眺めて見度い。

二、本論

(イ) 忠君愛國の觀念強きこと

我國民の忠君觀念の強いことには、少くとも三四の理由がある、先づ第一には我御皇室が國土と共に存在して居ると云ふとて、國造りの神話を見るに始め諸冊二尊が天浮橋に起ち蒼の中から造つたことになつて居るが、御皇室あつて此の國土が出来たことになつて居る。即ち少くとも此の日本の國土が此の世に出現した時或は日本の國土が人類の眼に映じた時から已に我皇室は存在せられて居た。而して第二には御皇室が存在の當初から君臣の分が定まつて居た

と云ふのである。即ち天孫降臨の御詔勅を拜すれば、豊葦原の瑞穂の國は世々我子孫の王たるべき地なり汝し行きて治めせ寶祚の榮へまさんこと天壤と共に窮なからんとあつて、皇位を嗣ぐべき正統を示され、そして二千五百有餘年連綿として正統なる一系に依つて皇位が繼承せられて來たといふことである。第三には御皇室と人民とが同根一體本家分家の關係にあること我國は古來一大家族主義の國で、御皇室から人民は派生分派したので天孫降臨當時に八百諸神あり、天岩戸の神話にも八百諸神が舞臺上に活躍して居るが、此の八百諸神は御皇室から分派したのであつて、今日の我々は此の八百諸神の後裔であるから、御皇室と我等人民とは宗家分家の關係に在るのである。第四の理由は我皇室の御理想が非常に高邁にわたらせられ然も人民に對して仁慈の大御心に富ませられたと云ふことである。日蓮上人は「日本國と申すは天照太神の日天にまします故なり」と仰

せられて居るが、我國の祖神を日天を意味する御名前天照太神と申し上げ、國の名を日本と云ひ、天子様の大御心を日心と申し上げ、天子様の御座を天日嗣高御座と申し上げるなど御皇室に關することが、皆日一即ち太陽を用ひられ、然も國號を日本と云ひ國民精神の表兆とも見るべき旗印に日月を象どれる、日章旗を用ふることは、我國が上御皇室から下人民に至るまで舉國一致して太陽を理想せられたことを證據だてると思ふ。

太陽には諸種の道德目を暗示する、或物があるが、太陽を理想とすることは此の或物を欣求するの心であつて、太陽理想の中には統一圓滿包容爽快清潔公正等を欣求するの心がある。

地球上に生存する者は動物たると植物たるとを問はず、健全に發育するには日光を受けねばならぬ、勿論肺結核菌や流行性感冒菌等人間生活に有害な微菌は日光に依て殺されるが、其他の生存物は皆

日光を必要とし殊に人間生活には日光は必須缺くべからざるものである。此の點から云ふと太陽は萬物を生成化育する徳を有つて居る。そして高山と云はず、幽谷と云はず、海にあれば野にあれば、日光の及ばない所はない。此の點に於て太陽は萬物を生成化育するにも普遍的に一視同仁的であることは丁度本佛世尊が毎自作「是念、以何令衆生得入無上道速成就佛身」の大悲願に住して、我々をして無上道を得せしめやうとせられ、然も皆吾子愛無偏黨て慈悲が普遍的に一視同仁的であるのと同様である。我御皇室が人類に對して君臨することは丁度太陽の如く又本佛の態度の様に人類を生成化育し、各々其の志を遂げ、其の所を得せしめ様とせられた。即ち普遍的に一視同仁的に人類を文化に導き幸福を與へることを理想せられた一證左である。神武天皇東征の御詔勅に天業を恢弘し天下を光宅すると仰せられたことも、又明治天皇が五箇條の御誓文を發布せられ

たことも、皆此の御理想の發現であると拜察し奉るのである。中古以來我國に封建的奴隸制度階級制度の布かれたことは大御心に背反するものであつて、史上的一大汚點と云はねばならぬ。現時在朝の爲政者及び國民の代表たる選良諸氏は前車の轍に鑑みて三思すべきであると思ふ。

日蓮主義は其の名が示すやうに太陽心を理想するものである。日蓮上人は法華經の如日月光明能除諸幽冥斯人行世間能滅衆生闇の日と、不染世間法如蓮華在水の蓮とを結んで日蓮とせられたので、明なること日月に若くもなく、清きこと蓮華に若くものなしと云ふ意味に於て、日蓮は日の如く蓮華の如く一切智者にして、又時々刻々に成佛の理を味ひ、法華經を體讀すること蓮華の理想の如きであると云ふ、自解佛乘から日蓮と名乗られたのであり、更に太陽理想の日本國に於て「日蓮より外に日本國に取り出さんとするに人無し」「日蓮をたばすは日本國の柱を

たばすなり」との國士的意味をも加味して日蓮と名乗られたのである。斯の様に無量の意味を包容して日蓮と名乗られた彼れ日蓮上人は、我御皇室の太陽心理の實現に終身の奮闘と畢生の努力とを捧げられたのであつて、鑒々として響く波の音七里ヶ濱の砂傳ひ龍口斷頭臺上の夕嵐に「夜もあけなば見苦しかるべし早く頸切られよ」との血に歡ぶ叫びも、北國寒山佐渡ヶ島塚原の三昧堂、四壁破れて風にまかせ屋根傾いて雪のまななる中に起ち、身に纏ふものとては破れ果てたる墨染の戎衣の一枚なるに、日本國に富めるもの日蓮なるべし（日蓮ほど喜び身にあまる者もあるまじ）との聖者の歡喜も「我日本の眼目とならん大船とならん」との大抱負も、皆太陽心理實現の努力による自然の發露であつた。時代の隔りこそあれ其が奈良朝の始めてあつたにせよ又徳川文化の爛熟期であつたにせよ、幾度びか外來の迷信外國の邪教なりとして一部から排斥せられた佛教、

しかも其の佛教の正系を傳へる日蓮上人がよく我國の理想を體得して（日は東より出て西を照す佛法亦亦斯の如し佛法必ず東土の日本より出ずべし」と叫んで内に法國冥合を叫び、外に日本中心の文化統一運動を熱叫して佛教を日本化し、日本及び世界を佛教化せんとしたことは果して人の力だらうか、終た神の力であらうか？ 今にして上人をしまさば、現時の社會狀態を眺め、現時の外來思想を聞いて、如何なる批判と如何なる態度とに出られるであらうか？ 蛟龍雲深く隠れて未だ片鱗をも望むことの出來ないのは時未だ到らざる爲であらうか？ 噫噫。

第五の理由は我御皇室が仁慈の大御心に富まざられて居たと云ふことでも、歴代天皇の御詔勅や御製を拜すれば實に明瞭である。

仁德天皇の「高き屋に昇りて見れば煙たつ民のかまどは賑はひにけり」の御製は申すもかしこし、其天之立、君是爲百姓、然則君以百姓爲本との御詔

勅や、雄略天皇の義乃君臣氣象父子との詔勅や、桓武天皇の惟王經國德政爲先惟帝養民との御詔勅や、明治天皇の

照るにつけ曇るにつけて思ふかな
我が民草の上はいかにと
夏の夜もねざめ勝ちにぞありにける
世の爲思ふこと多くして

等の御製は、如何に我が御皇室が仁慈の大御心に富まれて居たかの證左で、他國に其の例を見ない。殊に御皇室は民意を尊重せられて居たので、清和天皇の御詔勅には

蓋以萬機之成非廣詢難、以興功四海之尊非下問、無以成其功也、
とあり、聖德太子憲法第十七條には

大事不可獨斷、必與衆宜、論小事是輕不可、必
要唯連、論大事若疑有、失故與衆相辨
とあり、明治天皇は五箇條の御誓文に

廣く會議を興し萬機公論に決すべしと仰せられて歴世民意を尊重せられたから、明治二十三年憲法發布にも一滴の血をも見なかつたのである。他國の憲法は皆人民の血に依つて彩られた憲法なのに我國のは全然他國の其とは異つて居るのである。斯く比類なく仁慈の御心に富まれ、しかも民意を尊重せられたから是に對して人民は感激の至誠を捧げることになつたのである。

第六の理由は我國民が感激的であることであつて我國の様に氣候溫暖風物華麗山紫水明の境にあつては、其の住民は主として快潤に而も感情的である。従て義を見て勇み不義を見て怒り、仁に遇ふて感泣するのが常である。御皇室の正義公道人道を體得せる高邁なる大理想に感激して勇み起ち、一視同仁普遍的な仁愛の大御心に感泣して、忠誠の感情がいやが上に淳化せられて忠君の念は鐵をも溶かす白熱的なものとなつたのである。即ち神代に在つては富津

主命武御槌尊の二武神が天祖の出雲統制に身命を抛ちて盡したのを始めに、或は和氣清麻呂正成の如き誠忠無比の忠臣が出た、のみならず、詩歌の上にも海行がば水く屍山行かば苦むすかはね大君の云云の同伴家持の長歌の如き、又は源實朝の

山はさけ海はあせん世なりとも

君に二た心我あらめやも

と云ふ短歌の如き、擧ぐれば枚舉に暇のない程で、時に道鏡將門のやうな逆臣も出たが、八田知矩の歌の幾千度びかき濁してもよみがへる

水や御國のすがたなるらん

のやうに、國民は萬世一系の皇統を守護し翼賛して君民一和君臣輯睦忠孝一本の道德を國民道德の基本として今日迄進んで來たのである。日蓮主義は忠君主義である、即ち日蓮上人は(天の三光に身を暖め地の五穀に神を養ふは皆國王の恩なり)と云はれて、知恩より進んで報恩主義に移り、王臣の別大義名分を

明にしては、「隱岐の法王は天子なり權太夫は民ぞかし」と云はれて、義時の逆臣たるを攻め、「日本には源平二家と申して王の門守りの大二匹候」と云はれて、大義名分を明にし、又「但しうれしき事は武士の習ひ君の御爲に宇治勢多を渡し前をかけなんどしてある人は縦ひ身は死すれども名を後代に擧げ候ぞかし」と云はれ、又「此れ即ち王法の重く逆臣のむくひ也」と云はれて、忠君主義を絶叫せられ、更に「慈父王敵となる時父を捨てて王にまいる孝の至り也」と云はれて、忠孝一本の道德を道破せられて居る。日蓮上人の御活動は忠義の爲であるとも云ひ得られるのである。

近時我國民思想は漸く變調を來たして忠君觀念に稍や輝が入つた様であるが、我國民の團結心は此忠君觀念の結果であり、國民の進運は是に依つて齎らされたので、一度此の觀念が缺乏すれば國家は滅茶苦茶である。

我皇室の如く卓拔高邁な大理想を有つて出でになる天皇を翼賛して、人類文化指導の任にあたることは、實に光榮であり、生き甲斐のある生活と云はねばならぬ。我 天皇はアリストートルの哲人主義の哲人であり、儒教の所謂有徳の君であり、米國あたりに云はるる所謂絶大の指導者であり、而も國民精神の統一的權化であるから、天皇に報効の誠を輸することが、即ち自己を愛することにもなるので、斯る天皇を戴くことは我等のみ有する無比の光榮であり、又誇てあらねばならぬ。忠君主義の鼓吹は今の時代に最も適切緊要なこととて、日蓮主義は此の點に於て責任が重いが、同時に又大に他の宗教者流に對して誇り得る點である。次に愛國觀念に就て述べて見度い。

(未完)



淨土教と厭世思想

森 川 日 修

佛教には一貫した教理と、其教法を随宜説明したるものとありますが。此れ皆な佛院の大慈智光明中の一反射でありますから。一として捨てべきものでありません。

而し教法上、正系と傍系即ち本流と支流を能く考察しませぬと、何分浩瀚の經典であり、其解釋區々でありますから、自然混亂を來たしまして、或は佛敎は皆悉く佛院の教法であるから、何んでもよいではないかと云ふような粗雑な論も出るし、或は一部分に偏して根本義を排斥するような風にもなつて参ります。

之れでは、佛教は一は氣やすめのものになり、一は迷倒になりまして、何等益することがないことになつてしまひます。

故に經典を見ますに、この經典はどの方面を説明しどの主意が立場であるかを、夫々承知する必要があります。あらふと思ひます。そこで私は淨土教は現在の我々の身體、この國土を厭ふべきことを意識し、西方の淨土に稱名念佛の功德により往生すと見たのが、此の敎家の主意であつて、つまり淨土教は厭世思想を鼓吹する處に、彼の主義があらふと思ひます。時々淨土敎家から淨土教は別に厭世主義と云ふ譯でない

と辯明する人もありますが、其真意を知るには淨土經の敎意、敎祖の着眼等を調べなければ、新製淨土敎でありまして、法然親鸞もしらぬ淨土敎になりす、しかし法然親鸞をかりて、一小説を記述します人は人々の隨意であります、佛敎歴史中の法然親鸞としては嚴格に見なければ、佛敎の考察ではありません。

今や我國は世界大戰の波動を受け、一時は意外の好況に接し、成金熱に浮かされ、人皆浮足になりまして、恰も陽春麗かに櫻花爛漫たる時、狂醉亂舞せる状態でありましたが、宿醉未だ醒めず朦朧醉眼を開けば、何時しか花ちり、人散じ、唯だ頭痛と寂莫を感じ、加ふるに暴風雨切りにいたり、身に戰慄を覺へ、身心昏迷するように、世界の混亂、思想の險惡、經濟の亂調、生活難等ひし／＼身にこたへまして、醉客の暴風雨に遇ひ踴躍として、樹下でも軒下

でも雨宿りを求むるようになつてをりますのが、現在日本の状態であります。よつて何か慰安の法はないかと思ひまして、一時の雨宿りに宗教を求める人があります。

宗教を求める人には種々ありまして、何か人生苦の爲めに求める人もあり、病氣の爲めに求める人もあり、真理の爲めに求める人もあり、修養の爲めに求める人もあり、死後の爲めに求める人もあり、實に千差萬別であります、釋尊もこれをしろしめして、種々に説法教化遊ばれてある次第であります。

概して宗教に氣つきますは平調の時は兎角宗教に氣つき難きもので、何か變つた亂調の時宗教に氣つくのは普通の人情であります。尤も機勢を得んがため、名譽を欲するため、みへの爲めに宗教を利用した時代も、又人もありますが、多くは心の奥底に何

か求むるのが宗教に對する純なる態度であります。

今日宗教に關する種々の出版物等も見受けませんが、其中佛敎に關し又は佛敎中の物語、又は佛敎歴史中の人物を骨子とし小説風の者も多々あります。

私は今歴史中純他力を主張した、法然親鸞に就て、淨土敎について、一考察したいと思ひます。

是れを考察しますには左の三項により、順次考察して見ましよう。

- 一、淨土敎の史的考察
- 一、法然親鸞の着眼點
- 一、淨土三部經の教意

淨土敎の史的考察

淨土敎は印度の龍樹の「十住毘婆娑論」の易行品を引用し、其を根源とし、世親の淨土論から、支那の

曇鸞の「論注」となり、道綽の「安樂集」から、善導に因つて完成されたものとなつてをる。

淨土敎は唐以前に慧遠流あり、後に慈愍流があります。此の二流は餘り後世に傳流いたしません。

善導流の他力敎が本邦に至るの影嚮をもちたもので、淨土宗の法然、眞宗の親鸞共に善導流の淨土敎であります。善導以前支那に於て淨土敎を唱へ本邦に於ても法然以前淨土の思想はあつたものでありますけれども、支那で他力往生を極力主張したのが善導であります。

善導は唐の太宗高宗時代の人でありまして、他力往生を現實に實行した人であります。

志磐の「佛祖統記」に

善導は何處の人なるを知らず、唐の太宗の貞觀年中に道綽の九品道場て觀經を講ずるを聞き、感じ

て其弟子となり、後長安に至りて光明寺に居り、念佛の法門を弘むると三十餘年、後人に語て曰く此身厭ふべし、吾將さに西に歸らんとすと、乃ち柳樹に登りて、願して曰く、願はくは佛我を接し善薩我を助けて、我をして正念を失はず、安養に生るゝことを得せしめ給へと、言己りて身を投じて自ら絶す。

と、實に淨土往生の極意を實行したもので、如何に淨土敎が現世を嗤ひ人身を嫌ふかに窺れます。是れ「佛祖統記」の著者が惡意を以て、善導が捨身往生を記したものでありません、志磐は確的の論據と記録により、然も敬意を以て記したものと云ひます。

淨土敎者は柳樹から捨身往生したのは、善導でない、善導の弟子であると云ふて、道宣の續高僧傳によつて辨明せんとする。本書に

んや續高僧傳の著者道宣は善導在世に編纂せしものに於て、門徒の捨身往生は確信的の者である。故に私は淨土教は厭世思想を鼓吹するものにして、誠に人格を無視し、人をして卑屈退屈ならしめ、一口に佛教を厭世教として、今日世人に誤解せらるゝ罪は、確かに善導流の他力念佛が其原因をなしてをると思ふのであります。

そこで門徒の捨身往生は勿論、其後善導も捨身往生し、師弟諸共捨身したものであると云ふのは、彼徒の記主禪師の「觀經玄義分傳通記」に證明してをる。今度は彼徒は、當時善導と善道と二人あつて、善道は捨身往生したものでない「佛祖統記」第二十八に善道の傳がある。

善道は臨淄の人、大歳に入りて、手に任せて、巻を探り、觀無量壽經を得、之より十六觀法を修

し、盧山に慧遠の路を訪ひ、終に終南山に通れて、般舟三昧を修すること數年、復晉陽に行いて、道綽禪師に従ひ、無量壽經を受け、其化京師に行はれ、歸するもの市の如く、忽ち微疾により室を掩ふて怡然として寂す。

淨土教者は此を取り、善道は大歳に入り淨土教を手に任せて探しあてたと云ふ。これは随分あぶない話で、若し此を信とせば、重大の信仰問題を、盲ら滅法に神籤的に探りあて、其て釋迦牟尼世尊の御本意が淨土教にありと云ふに至つては、餘り兒戯に類した話である。處が淨土教者が此の淨土經を探り當てた、善道を以て捨身の善導にくつゝけて、善導が經を探りあてた是であるといふ。それでは胴と首を勝手に取りつけて、捨身の善導も、探りの善道も二人共助からん次第で、今度は門徒末流が二人を

殺して、往生せしめたことになる。

而し淨土教家が善導が柳樹から飛下りて死んだと云ふことを、むりに辯解するは愚のことであると思ふ、元來淨土教は此身は實につさらぬ此土は不潔の國で厭ふべきものと觀念し捨身する處に本意があるのて、此身を向上し人生を淨化し、國土を立派に

し、文化を勤めんと云ふことは、現在自己に目醒めて來たときに、むりに説明せんと努むるもので、善導は實に淨土教に忠實で、熱烈で、徹底したものである、眞に他力淨土を信せば、善導の如く捨身する處に妙味がある。



少年欄

古田 昂 生

ようやんとこども

私たちの村に「ようやん」と云ふ少し馬鹿な男があらうました。

本號から少年少女諸君の爲に此の欄を設けました。いろ／＼おはなしやうたやを毎號のせてゆきたいと思つてゐます。少年少女諸君もこの欄を楽しみにして次號を待つてゐて下さるやうに……

みんなは「ようやんの神さま」と云つてゐました。馬鹿がなぜ神さまでせう。

「ようやんは、馬鹿でしたから少しも怒つたことがありません。」

「ようやんは馬鹿でしたから少しも泣いたことがありません。」

「ようやんは馬鹿でしたから少しも不平を云つたりブツブツ呟いたりしたことがありません。」

「ようやんは毎日／＼笑つてゐました。ようやんは年中笑つてゐました。雀が窓際でチュ／＼鳴いてゐるときでも、鳥が畠の上でカ／＼鳴いてゐるときでもようやんは笑つてゐました。」

「ようやんが笑つてゐないときはようやんがお庄屋さまの納屋の中でグ／＼寝てゐるときだけです。て、村のひとたちはようやんを「神さまだ」と云つてゐるのです。」

「ようやんの神さまは朝は早く起きて、村の人たち

の處へ、畠や畑を一生懸命に手傳つてやつたり、村で一番大きい松見坂の真中に立つてゐて村の人たちが車をひいて、エツチャ、よつちやら、エツチャラ、よつちやらと苦しんでゐるとすぐその車のうしろに行つて

「さア押して上げませう」

と車を押してくれるので村の人たちはどの位助けられるか判りませんでした。

みんなは「ようちやんの神さま」「ようちやんの神さま」と云つて大切にしました。

「ようちやんはまた子供がたいへん好きでした。一生懸命働いて村の人たちから貰つたお駄賃は、切つとお菓子を買つて子供たちにやりました。そして一共になつてよろこんで遊んでゐました。」

或る日のことでした。庄屋さまの處の子守が庄屋

さまの大切な坊つちやんをおぶつて遊んでゐました

するとそこへようちやんがきました。

「ようちやんどこへ行つてきたの」

「あ、畠へ行つて来ただ、あ、坊つちやまを、おんぶして、坊つちやまはいゝ子だのを」

ニコ／＼笑つて坊つちやんをあやしてゐました。子守は

「ようやん、このこども上げやうか」

「ウん、おくれ」

「よし、上げよ」

「さア貰つたぞ」

と坊つちやんを抱いて、こんどはおんぶして、

「ねんねや、坊つちやん、

けふから、あらがの子だ。

ねんねや、坊つちやん

いゝところへゆこよ。

ねんねや坊つちやん」

と、あやし乍ら、どこかへ、行つてしまひました。子守はぢき歸へつてくるだらうと思つてゐまし

た。却々歸つてきませんでした。二日、三日、四日、五日たつても歸つて来ませんでした。

ですから村中は大騒ぎになりました。村中の人たち總出になつて、山や野や林をふみわけて一生懸命にさがしましたがとうとう見つかりませんでした。

それから十日ばかりたちました。

ようちやんはひよつこり歸つてきました。坊つちやんを出て行つたときと同じように、おんぶしてゐました。

ようやんは眞ッ青なヒヨロ／＼とやせつてゐました。

坊つちやんは丸々とこえてゐました。元氣のいゝ顔をしてようやんの背中でニコ／＼してゐました。

それからしばらくするとようやんが死んでしまひました。

村の人たちは

「切つと十日の間、自分は何も喰はず、飲まずに坊つちやんにばかりいろ／＼なものを喰べさせてゐたのでとう／＼死んだのだらう」と云つてゐました。

記事

各地教信

●東金コドモ會

千葉縣東金町は基督教の日曜學校幼稚園等を設け、純真な福田を建設せんとしつゝありて、聖祖の教風を拜し、主義宣傳に志す者の愛慮し懇懇としつゝありしが、

永き宿願としての本會は、同町本漸寺を會場とし、七歳より十三歳の兒童を正會員に、例月第一第三日曜午前八時より開會し、會員祝の始式に次ぎ、國歌、講話、兒童の童話童話、宗教、等の序を以て進み、既に五回の開會を重ねしが、發會に貳百參拾名の會員は、今や四百餘名に増加し、七月十六日第三日曜例會には、兒童自由畫展覽をも爲せしを以て來會する者五百餘名、中村信正の「疑信暗鬼」小川氏の「暴風拜觀」野口師の「くま若丸」等、有益にして面白き講演の後、兒童男女生各年級より任意登壇して、兩唱合唱お伽話の徒然かたつむり」と題せる栗原氏所作の童話劇あり、十一時半發會の内に終り、午後は一般に自由畫展覽を公開せし爲め、來會せる父兄及高等女學校の圖書教員の引率せる女學校生多數の參觀等ありて、之れ又た盛なりし、尙當日出品の自由畫は百五十點、賞に入る者十五點なりし。

第一布教團の活動

七月一日午後七時より於淺草吉野町常福

寺開會、「財と徳」高木布教師。「清濁に就て」莊岡正。○二十二日午後二時より於大井町第一小學校教職員慰安懇談會、「町治と教育」名和男爵。「教育の社會化」松井法學博士。「生活の軌範」莊岡正。○二十七日午後七時より於品川町本光寺立正安國會、「妙法の本質力」今成權大僧正。「佐渡の日蓮」大谷内越山。二十八日午後七時より於妙蓮寺門前屋外傳道、小泉中島高木笹川諸師の獅子吼あり。

七月京都活動史

七月一日於本山國總會終行後講演、「人間の眞價」有田安道師。同日夜健兒會例會第二回辯論練習男女會員の有辭後仁木、土持兩師の講評ありたり。△二日夜於本山方丈護正會例會「涅槃經經講」萩原本山部長。△六日夜健兒會例會山田三郎、有田安道師の童話。△八日朝塔中成就院にて護正婦人會例會、日蓮學人の人生觀「有田安道師」。△同日夜川東本正寺に於て二樂會例會、世出庵道の宗教「豐田通泰師」。法華題目鈔詳解「金光孝順師」。△九日塔中正行院に於て正行婦人會例會、「人生々活と日蓮主義」萩原本山部長。△同日塔中大慈院に於て法王婦人會例會、法華經の功績「土持良進師」。△十日川東本正寺に於て本正婦人會、情は人の爲ならず「金光孝順師」。△十一日夜健兒會例會、「平岡の供打」小林啓善君。「日蓮實戰記」仁木陽道君。「三郎の孝心」有田安道師。△十三日本山にて宗經會終行後講演、「歩を行かすして」金光孝順師。△十六日塔中法光院にて婦人會例會、「第一の寶」豐田通泰師。△同日夜健兒會例會なきけ。山田三郎君。「日蓮上人の御高徳」土持良進師。△二十日村雲門路にて法華會、高僧、「聖者に何をか學ばん」金光孝順師。△廿一日健兒會例會、豐田師外教名の童話。△廿三日東京統合學林生布教團講演を振出しに例年の通本山境内に於て一週同達續續大講演會開會と決

定來に今夏は日蓮主義宣傳活動寫眞株式會社第一回の製作になる「鍋かぶり日親上人」の一代記を妙滿寺護正會主となり四日間借入主並宣傳の爲め一般へ無料觀覽せしむる事となり數日前より妙滿寺布教部に於ては一同本山に會合準備に忙せらるる先づ境内に大天幕を張り數十の涼臺を配置し全市へ一通過の案内に護正會より八千の觀覽券を同封發達す順次左の記述に依り其の盛會を知る。△廿三日後四時學生團一同京都歸着有田、土持、豐田、大岡四氏出迎、同日本山講堂に於て數十名の健兒等が勇ましき國歌合唱後直に開會、「開會辭」有田安道師。「佛の大慈悲と吾人の信仰」福澤泰道君。「常精進」中野信良君。「日本國と法華經」藤原純君。「鎌倉佛教に現れたる三大思想」星野純義君。「立正安國の意志」補導萩原國有師。「開會辭」土持良進師。喜怒哀樂共に直接外見に示すを憐む京都人士なるに百有餘の熱心なる聴衆は純眞にして飾らざる學生諸氏の熱心には頗る感動し一名も退去する者を見ざりき。△廿四日夜境内廣庭にて納涼傳道開會健兒會講師山田、土持兩氏が兒童に對し一席の童話後、法悦の生活「小林啓善師」。「日蓮主義の本領」有田安道師。「佛陀出現の意義」萩原日道師。△廿五日夜八時頃山内滿員の盛況、心に食物を與へよ「金光孝順師」。八時半より足利時代の懷舊日親上人の活動十分同休中萩原部長の講演後引き續き寫眞來會者二千名。△廿六日六時半より順次押し寄する聴衆は七時半既に滿員八時には裏門及表大門を開扉するの大盛會なりき開會に當り兒童に對して林、豐田兩氏の童話後、「正義の戰」土持良進師。續いて日親上人の活動寫眞來會者四千名。廿七日午後より降り出したる豪雨に依り漸く涼氣を覺へ聴衆昨夜の比に非ず兒童の爲めに、「日親上人一代記略傳」林滿一君

終りて、日本國と日蓮「小林啓善師」。「覺醒」豐田通泰師。續いて活動寫眞映寫。廿八日於本山國總會終行後講演、「至誠野老乾一簡」。同日夜本山境内にて納涼講演「童話」豐田通泰師。「五大要綱と日蓮主義」有田安道師。△此の大盛況を記念する爲め寫眞攝影來會者四千名終りて各役員の爲めに慰勞會開會。△廿九日夜納涼講演「童話」土持良進師。「日蓮主義と人生觀」大岡孝順師。「生ける金光孝順師」。「折伏を誰か無慈悲と云はん」萩原日道師。三十日七月中納涼講演最後日、法華宗より觀たる淨土、別所小三郎氏、清き犧牲「土持良進師」。「本化の使命」萩原日道師。

北總教信

七月八日北總青年布教團主催の下に印旛郡八街町八街館に於て大講演會を開く、午後七時開會、「開會の辭」山田誠心師。「信仰の生活」中村決誠師。「人間の眞價」高貴布教師。「余與手代木常盤師」。當夜は雨天なりしも青年有志衆多數來聴せられ意外の盛會なりき。因に北總青年布教團は去る四月二十八日を以て風々の聲を上げたる同地方青年有志に依りて組織せられたる者也。○七月九日午後七時より山武郡丘山村清達寺に於て開會。「日蓮記」手代木常盤

師「信心」山田誠心師。○七月十日午後七時より同郡丘山村丹尾東成寺にて開講。身延に於ける日蓮上人「高貴真一師」。

久留米教報

四月廿一日於辻宅「信仰所感」藤本勇平次「戒の本義」平岡本信「釋尊の教化」中原通應。△廿二日檀華宅に於て、「法華經の正信解」中原。△同夜檀華青年會の爲に、「現實生活の基調」中原有教師。△三十日於八丁島「信仰生活の價值」中原通應。△五月四日於本壽寺「南無釋迦牟尼佛」中原山主。△同五日本信會。△同六日天晴會「デモクラシーと佛教觀」中原法學士。△同七日下午丁青年會の爲に、「開會挨拶」顯彰會長「自覺より覺他」中原有教師。△十一日於岩橋宅「日蓮聖人の法華經觀」中原通應。△十二日本壽寺同信會。△十三日天晴會朝會出張講演、於持丸小學校講堂。「開會の辭」吉野校長「努力としての努力」平本秀雄「日蓮聖人を慕ふ」新開清八「報恩の辭」中原法學士「日蓮主義の綱格」中原有教師、餘議統一節、藤本一得。△十六日地明會「新時代の教化」中原山主。△二十日天晴會「思想戰士の覺悟」中原法學士「法華經要義」中原通應。△二十四日、立宗記念講演、畫於本壽寺、「人生と宗教」中原山主。夜、「日蓮聖人を慕ふ」新開「立教開宗の精神」中原法學士。△第二同郡城行、天晴會出張講演、於妙經寺、「開會宣言」幹事。「國を思ふの信仰」吉永賢「新時代に處して」田中實「偉大な日蓮聖人」新開清八「近代思潮と法華經」中原法學士「蓮華の思想と社會の淨化」中原有教師。△六月三日、天晴會「安樂行品觀」中原法學士。△七日於本壽寺、「安國論に對する反響」中原山主。△十日妙經寺定例講話。△十四日於井上宅「日蓮主義の綱格」中原山主。△十七日、天晴會、新開、中原、山主。の講演及び田村法學士の鑑

於島村氏宅、「寂光の本土」本郷常次郎氏。十一日午後八時於松永氏宅、「信仰の極致」本郷常次郎氏。十三日午後八時於中野氏宅、「法華經と諸經の關係」本郷常次郎氏。十八日午後八時於宮崎氏宅「信仰の威力」本郷常次郎氏。種々御挨拶御書講義「石橋會章師。廿一日午後二時本壽寺益施餽鬼、藥王品の一節」石橋會章師。機海波羅「窪田純榮師。廿二日午後二時本壽寺益施餽鬼、化城喻品の一節」窪田純榮師。「本述論」石橋會章師。「蓋蘭盆と施餽鬼の考證」本郷常次郎氏。廿六日午後八時本壽寺天晴會、「方便品觀講」窪田純榮師。「元品無明」石橋會章師。廿八日午後二時本壽寺益施餽鬼、「甘露の法味」石橋會章師。△立正觀鈔の一節「窪田純榮氏。歡喜充滿身」本郷常次郎氏。

俳聖芭蕉の遺跡

二川妙泉寺運挽回

(新愛知新聞より轉載)

愛知縣渥美郡二川町妙泉寺は舊東海道に當り櫻の名所て且つ松尾芭蕉の遺跡ある由緒深き寺であるが一時荒廢に歸したけれど去大正七年東洋大學出身の加藤圓順が同時の住職となつてから以來銳意寺運の挽回を圖り統一團二川分會、土曜會、日曜學校杯を設けて育英に努め孤立無援で多大の私費を投じ克く

生寺圖ての所感。△七月一日天晴會、「法華と念佛の思想批判」新開幹事「所感」河田幸光師「法華經要義」中原山主。△五日正信會、△八日於光行、△九日於中野。△何れも中原師講話。△十二日同信會、△十六日本壽寺總施餽鬼法要動機、畫、町田幸光師のお師講話に兒童を中心とした一會の榮、歡喜の色を浮べつゝ多大の感動を與へられぬ。夜、出海後義師の設教あり、餘講藤本君の聖傳統一節あり、共に深き感激と法悦の念に住せしめたり。△十五日天晴會、「思想の選擇」新開君、「日蓮主義の根柢」中原法學士「法華經要義」中原有教師。

伯耆松崎

七月八日夜於東郷學校社會教化國民思想指導を目的に活動應用講演聖樂團主催「現代宗教家の態度」富田日進。△同九日、松崎西向寺にて各宗共同布教會にて「現在思潮と衆生恩」富田日進。△同十日、青谷統一團支部例月會に於て、「日蓮主義大綱其三」富田日進。△同十四日、松崎於本立寺、「眞の日蓮主義」富田日進。△同十五日、松崎本立寺に於て聖樂團例月講演、「日蓮聖人傳其五」富田日進。△十六日、市橋宅にて家庭講演、「日蓮聖人傳其三」富田日進。△十六日同信會夜「方便品」原田日男。△廿三日通夜本壽寺にて、「三蓮德」原田日男。△廿六日本壽寺にて學生團講演會、「佛の大慈悲と吾人の信仰」國澤泰溫「積極道」中野信良「眞傳と眞義」藤本純。日本に於ける日蓮主義の位置「星野純義」日蓮聖人に學べ「栗原顯有」。開閉の辭「原田日男」。△七月廿八日天晴會に於て修養會、「所感」藤原武。「生活の安定」原田日男。

金澤日蓮主義講演

七月三日午後八時於別所氏宅、「法華經の利益」石橋會章師。「日蓮主義の信仰」本郷常次郎氏。七日午後八時

至難なる教化事業に奮闘せるに感激せし同町在郷軍人會二川班長山本歌之介統一團員山本幸三郎の兩氏發企となり田二反五畝歩を勞作し其收益金全部を同師經營費の一端に寄附せんとて同志の男女數十名協力して此程田植を終了したが尙丸二製絲工場主田中岩太郎氏は自己所有の田を無料提出を申出て其他肥料杯を寄附するもの續出せりと。

梵鐘の響きを集る

千餘の少年少女

名古屋常徳寺の小供會

夕暮を傳ふて韻々と梵鐘が響き渡ると、蟻の様に小供が集つて来る、今夜は常徳寺の子供會なんだ。本堂には明るい電燈の下に、小さい日蓮讃仰者が一ぱい集つて居る、豆機關銃を連發した様な拍手に迎へられて、雷のおやじさん常警法師が演壇に現れた、中に入りまつた得意の講談「日露戦争餘談沖橋山雨氏傳」を、滑稽な口調で續ける、小さい國民は

ありし昔の志士の面影を追懐しつつ、暑さも時間も、一切を忘れて居る、時々夕立の様にサアと拍手がなる、後は千餘の聴衆を入れた本堂がシンとして水を打った様だ、こんなにして打ちこんであいたら、將來の國民思想は大丈夫だと思はれる。

新愛知新聞の古田先生、松永先生等の教訓を含んだ童話があり、夏の夜は愉快に更けて行く。

毎土曜日の夜常徳寺に集つて来る小供の数は、二百から次第に増加して今は千を超えるに至つた。時に大會を開いて活動寫眞やら、童話劇やら、色々な有益な催しがある。春秋二季には遠足をやる、統一團の運動に共鳴して主義宣傳の提灯行列を試みる。かつて小さい人達の仲間になつても、日蓮主義は中京教界の王者を以て任じて居るのだ。

監督布教師 山根日東僧正著

日蓮主義百話

三五版三百七十頁 天金總クロース類美本

定價金壹圓五拾錢 送料 金 六 錢

本書は著者が嘗て雑誌『統一』紙上に投稿連載せし『機微譚話』の累積一百話を改題せしもの今茲に聖誕七百年報恩の爲に之を上梓し初版は著者有縁の道俗に法施したり今回之を再版に附し實價を以て頒賣す布教教材として修養資料として趣味津津たるもの僧も俗も競ふて購讀あれ賣切れぬ内に。

東京市淺草區北清島町十四番地

發賣所

統一閣

振替東京二二九番

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

とも、甘酒のやうな味が出るとも極つては居ない、縁のかけやうに依つて同じ米が酢とも成り甘酒とも成るのである。況んや靈妙なる心を有つて居る者は――物質も靈妙であるけれども、物質の靈妙は餘程科學が進歩しないと判らぬ、唯だ私は石炭の事に就いては非常に驚いた、この間瓦斯會社に行つて見たのであるが、石炭から石炭の脂みたやうな物が搾れてコールターが取れて居る、アノ黒いコールターを精製して居るのを見ると、これは大島精製所といふものが本所の先にあつてやつて居るが、純白な肥料になる砂糖と同じ物があのコールターの中から取れて居る、それから石炭酸も取れる、揮發油も取れる、又染料になれば赤でも青でも紫でも總ての染料、モスリンを染めて居る染料などは皆コールターの眞ツ黒の中から取れて居る、あれが或は紅葉の葉とな

り牡丹の花となつて呉服屋の店頭に曝される譯である。さういふ譯であつた石炭の眞ツ黒の塊りの中からでもあれだけの物が取れるとすれば「この石炭といふ物は黒い色ぢや」といふのは抑々素人の考であつた。石炭は眞ツ白だ」とも言へる「馬鹿をいふな、石炭が白いものか」といふだらうけれども、その中から今の通り眞ツ白な砂糖のやうな物を取り出すことが出来る、だから石炭を黒いとのみいふのは素人の言ひ方である。又それがどういふ臭ひがするかといふと、臭ひに於ても非常に違つて来る、石炭の臭ひといふものは誰も能く知つて居るやうな臭ひであるが、あの中から香油が取れるし、非常な香氣の芳い物も、澤山は取れないさうであるが少しは取れる、その臭いといふのも逆も石炭酸の臭さ所ではない、名前は忘れたけれども非常に臭い物が取れる、それ

は堀の所に鼻をやつたら逆も歸つて飯が食へぬさう
て、「そこまで嗅いではいけませんまい」といふから、
私は横からそつと嗅いで見たが、非常な臭い物で
ある、それを製造して居る人間は、家に歸つても女
房も子供も側に寄りつかんと言つて居る、スツカリ
風呂に入つて衣服を着換へて歸るのだけれども、何
處か身體に臭味が脱けないさうである。そんな物ま
で取れるのであるから、同じ人間でもやはりさうい
ふ臭いやうな、側にも寄りぬやうな者にも成る譯で
ある。それを今茲ていうて居るので、その妙味を説
いたものである。「諸佛兩足尊、法は常に無性なり、
佛種は縁に従つて起ると知しめす」——みな佛の種
を有つて居るから善き縁を以て導きさへすれば、ど
んな者でも善い方に向いて發達して來るものである
といふことを能く知つて御座る。是の故に一乘を説

きたまはん」——一乘の教を與へるとは、その佛性
を開く所の一番善き縁として與へるので、世の中に
種々なる善き縁があるけれども、佛性を顯はす一番
適切なる善縁として、一乘の教、佛教といふものを
與へたものであるといふので、これは洵に真理の詰
んだ説明である。「是の法位に住して世間の相常住
なり」——そこで徹底して考へると「是の法」といふ
總ての事柄は、皆その儘その本來の左様な不思議な
位地に居つて、現れは一時のやうだけれどもその根
は實相の所から生へて居るものであるから、人間な
ら人間が此處に出て居る、一時の現象だといふけれ
ども、これはやはり法位に住して居るもので、その
奥には不滅のものがある。丁度海なら海の水が澤山
に泡になつて飛んで居る、泡は一時飛沫となつて消
えてしまふやうだけれども、それはやはり大海の水

が泡になつて居るので、その儘不滅の物が一時の現
れとなつて居るものである。心なら心の働きたした
所が、或る時は憎いと思ひ、或る時は可愛いと思ふ
といふやうに、始終浪立つて居る、それは怒るも一
時笑ふも一時といふけれども、やはり心の中にある
ものが其處に顔を出して居るのであるから、消えた
と思つても又何時でも顔を出す。であるから世間相
常住にして、世間の夢か幻かと思ふやうな事柄で
も、そこに又尊い意味が存在して居るので、人間互
ひに親子となり夫婦となつて社會を造り出して居る
その事が、決して夢幻といふものではない、その
中に無限の價值が生じて來る譯である。

さうしてその縁を選ぶことが非常な大事な關係に
なつて行くので、即ち社會の教化を重んずるとか、
政治を良くするとかいふやうなことは、皆それは縁

に従つて變つて行くものであるから、「斯う世の中が
惡くなつて來ては逆も仕方が無い」と非常に悲觀す
る人もあるけれども、さういふものでもない、これ
はやはり學說なり思想なり世間の事情が人心を墮落
惡化せしめたのであるから、やはりその本に戻つて
それを癒せば治らぬことはない。その本は何處にあ
るかと言へばやはり宗教の問題だと思ふ、即ち唯物
思想と宗教思想の第一戦列の戦争を、今迄みな傍觀
して居つた、政治家も「宗教と唯物思想の戦ひは吾
れ關せず焉」である、經濟家も傍觀して居つた、教
育者も傍觀して居つた。「そんな事だ、そんな事だ、吾
々は宗教の興廢には關しない、唯物思想に款を通じた
道徳論の上
に於て

る。さうして宗教は孤立の位地に置かれて、今日に來つたが故に、遂に人心より宗教思想が去るやうな事になつた、即ち宗教思想と唯物思想との第一の戦争を傍觀したが故に今日の如くなつたと思ふ、その本に戻らんければ逆もいかん。私は終始考へて居る、階子段の一段ぐらゐ踏み外す位のこと、僅か一尺か二尺だ、何でもないと今の人は考へて居るけれども、一段踏み外したら尻餅をついて一番下までズドンと落ちて頭をブチ割る事になるのである、最初の宗教の信念の一大事の所をブチ割つたが故に萬般の事が今日のやうになつてしまつたのである。日本などでも今日の狀態は未だ――緩慢に現はれたものである、これはモウ少し猛烈に現はれて来るものではないかと思ふ、未だ――一方に宗教思想が幾らか引締めて居るからであるけれども、之を一逼に

除く
漠然と

る、親の法事も重め
居る、お寺もそこらに

宗教心といふものが衰へたやうな、亂暴を力に占めて居る。之を全然抛棄したその時は最早や潰亂の巷となる、そこには如何なる政治を施しても法律の適用をやつても、警察力を應用しても到底駄目だと思ふ、唯だ殘るものは暴力だけだらうと思ふ政治と言つて見た所が軍隊の力、或は警察の力と民衆の暴力とが對抗して、辛うじて保つて居るやうになつたならば、モウその社會は壞れて居るものといふべきだらうと思ふ、僅かに暴力と暴力に依つて突張り合つて居る、例へば泥棒が外から戸を開けやうとして叩いて居る、内からそれを押へて居る

といふことになれば、仕事も何も出来はしない、内外戸を押へて相争つて居るならば、最早やその社會は壞れて居るものだらうと思ふ、戸が壞れて中に泥棒に入つた時だけが壞れたものではない、白晝公然泥棒が門外に來て「入るぞ」と言つて戸を叩く、内から「入られては大變だ」と言つて戸を押へて居るやうなことになるれば最早や駄目ぢや。今日の文明の狀態はそれと同じ事になつて居る、公然「壞すぞ」と言つて泥棒が白晝戸を叩いて居るやうな事になつた、それはモウ宗教思想を人類より奪つたら斯の如く成るといふ事を釋迦は豫言して居る、大本教のお筆先みたやうなものではない、釋迦大覺の豫言の中にはそれがはつきり出て居る、恐くは基督もその點は同感であらうと思ふ、孔子も同感だらうと思ふ、又多くの達人はその觀念に於ては古來一致して居ると思

ふ。その大事な所を十八世紀の中末以來、唯物文明に偏傾して來る時、いろ／＼の點から宗教思想を人心より奪ひ去つたが爲めに、事今日に至つたのである、區々たる事を論争するよりも、その一點に集中して現在の文明を立て直さなければならぬ。その代りには今日はいろ／＼の點が發達して居るから、今後に復活する宗教といふものは、過去のやうな弊害多き又低級なるものではないかんから、モウと完全なる理想的なる宗教の復活を圖らなければならぬ、即ちその宗教の必要を徹底的に自覺し、さうしてその宗教は「何でも宜しい」といふやうな宗教になくして、十分の研鑽を

思ふ、「一天四海打亂るならば廣宣流布疑ひ無し」と日蓮が言つたのは、さういふ意味であつたかそこは能く判りませんけれども、所謂白法隱沒、闢謬堅固どうも斯うもなくなつたその時、大白法としての法華經必ず廣宣流布すべしと日蓮聖人の言ひし事が、或は今日のやうな時代を指すのではなからうかと思ふのであります。

二二、舍利弗當に知るべし、我れ佛眼を以て觀じて六道の衆生を見るに、貧窮にして福慧無し、生死の險道に入つて相續して苦斷へず、深く五欲に著すること犂牛の尾を愛するが如し、貪愛を以て自ら蔽ひ、盲瞶にして見る所無し、大勢の佛及與び斷苦の法を求めず

慾に走ることを以て、それが幸福だと思ふから、それは自己を害することになる。恰も犂牛といふ牛が自分の尾を舐つて居るが爲にそこから腐れが入つて死んでしまふが如くに、自ら自分を殘賊することに成つてしまふ。さうして「貪愛を以て自ら蔽ひ」てこの貪愛といふのは今の所謂貪慾、色慾等の爲に精神が蔽はれてしまつて、あのものは何も判らん、唯だクロボトキンとかマルクスとかいふやうな事ばかり言ふやうになつてしまふ、貪愛を以て自ら蔽うて居るが故に、「盲瞶にして見る所無し」で、それ以上の高いものは判らない、ガヤ／＼言つて調査とどづき合をするやうな事になつて、全く盲瞶に成つてしまふ、さういふ物慾の爲に高き精神の光を蔽はれて居るが故に、何度言うて聞かせても判らない「大勢の佛及與び斷苦の法を求めず」で、非常な偉大なる

深
てんと
大悲心を起し

これは前にいふ佛の智慧から見て、有様が説いてあるので、この佛の智慧の開けた眼から見ると、六道の衆生は殆んど功德の上に於ては貧しい者であつて、福も智慧も共に無い洵に暗愚な者にして、罪惡多き者である。それ故に生死の險道を辿つて彼處に生れ此處に死し、流轉を辿つて、さうして深く五欲に著して居る、五欲といふのは今日の所謂物慾で、眼、耳、鼻、舌、身といふ肉體上から起る慾望の爲に精神生活を忘れてしまつて、今の所謂唯物主義の文明に墮落して、さうして「犂牛の尾を愛するが如し」で、唯だ自分がさういふ色慾貪

勢力があつて、大勢の者を悟らす所の尊い佛の有難さも判らぬければ、如何にすれば人生の苦痛を除くかといふ道も判らぬ。唯だパンの配給を論じたならば苦痛が除かれると思つてドタバタして居るのは、如何にも憐れな者である。やはり高き精神の生活に導いて道德觀念を養ひ、宗教の信仰を求めるといふ人生をモウ少し高い者に導いて行かなければいけないのである、低い方に墮したならば修羅の巷となることは免れ難いことである。然るにそれが判らぬで「深く諸の邪見に入つて苦を以て苦を捨てんと欲す」——「諸の邪見」といふのは擧げれば六十二見といつて、様々の誤解を生むのであるが、その六十二見の根源といふものは何かと言へば、斷常二見と稱して斷見、常見の二つである、之を佛教では邪見外道といふ、それは何かと言へば今の所謂マルクスの

思想、クロボトキンの思想を指すのである。斷見といふのは靈魂滅亡論をいふのであつて、無宗教の思想、所謂唯物思想である、斷無と言つて人の魂は死んだら消えて斷滅してしまふものである、靈魂ナシといふものは無いといふ、靈魂の滅亡を説く位であるから神や佛の存在は無論認めない、今の唯物思想の最も狂暴なるものを斷見といふのである。それから常見といふのはこれは又その反對で、人間は人間に生れるとか、或る階級高き所に生れた者は、何時でも階級高き所に生れられると言つて、富豪の者は何時も富豪の榮華を食ふことが出来るやうに思つて、徳を積まず善を行はない、特權階級に屬する者は特權を恃んで善を行はない、この階級思想が即ち常見といふものである。人間といふ者は生るべき所が極つて居る「お前等は低い所の乞食である、俺は

富豪である、特權階級である」といふやうに、考へて居る。さうして左様な地位は唯だ一時のもので、悪い事をすれば地獄に墮るとか、現在にしても左様な名譽とか榮華といふものが永續するものでないといふことは少しも考へないで、一時の榮華に心を囚はれて自働車に乗つて驅づり歩いて居るといふのは是れである。さういふ常見といふ一つの囚はれたる考へと、斷見といふ神佛も無いといふ自棄くその思想、即ち今日で言へば富豪の奢侈淫蕩と、それから細民の狂暴といふその思想である。斯様なものは昔あつたものに違ひない、今日始めて斯ういふものが出来たのではない、過去に於ても社會を毒する者はこの斷見、常見の二つである。それ故に低い者も高き者も皆俱に徳道に活き宗教に戻れよ、國王と雖も細民と雖も皆高き教に來つて菩薩の行に入れよと説

いたものであらうと思ふ。この佛の教はその儘現代を救済すべき所の最適の教化であると私は信ずる、少しも之を造りかへる必要はない、その儘現代の病弊を救うて居る教化であると思ふ。さういふ工合に斷見、常見を本にして居るが故に「苦を以て苦を捨てんとす」で、斯うしたら宜いとかあゝしたら宜いとか言つていろ／＼やれば、やる程段々苦みを増して来るやうになる、血を以て血を洗ひ、苦を以て苦を洗ふもので、「資本家が横暴だ」と言つて労働組合を拵へたかと思へば、今度は労働組合の横暴といふものが始つて来る、それを取締るといふので法律の適用を始めれば、今度は官憲の横暴といふことになつて来る。役人が横暴でいかぬといふので今度憲兵に委せれば、憲兵の横暴といふことになる、何處まで行つても皆己れの權力地位を利用して勝手なこと

をやるのであるから、どつちに廻つても同じ事だらうと思ふ。だから之を直して行くにはどうしても道徳心と宗教心と、高き精神の生活に導くことに於てのみ救はるべきものである、「是の衆生の爲の故に而も大悲心を起しき」——可哀想な者である。左様にして唯だ自分の低き欲望の爲に争ひに進んだならば共倒れになる、甲も乙も丙も丁も皆苦みの中に沈み行いて、現在には不安の生活に襲はれて罪を作り、死後はそれが爲に惡道に墮ちて永遠の沈淪を辿らなければならぬ、憐れな者共ちやと思つて之を救済の爲に働かれるのであるといふ、これは洵に明かに佛の慈悲の事が説いてあるのであります。

二三、今我れ喜んで畏れ無し、諸の菩薩の中に於て正直に方便を捨て、但無

上道を説く、菩薩は是の法を聞いて疑網皆已に除き、千二百の羅漢は悉く亦當に作佛すべし。

この所は方便品を聴いて菩薩達の喜びを述べた言葉であり、第一に菩薩が喜んで、それから舍利弗などの弟子達が喜んで、段々に人々が救はれて行く、その菩薩が先づ一番に喜んでいたのである。佛が今法華經を説かれた。今迄は方便の教を説いて居るからそこに缺點があつた、故に若し哲學者なり、宗教家なり、考へ深き者が來て、之を突込んだ時に於ては佛敎といふものは壊れてしまふ、般若經なら般若經だけが佛敎だといふならば、一方から突込む隙がある、然るに法華經を説き了れば、モウ自分の理想として完全なるものと信じて居るが故に、「今我れ喜

んで畏れ無し」、モウこの教を説いたならば我が教は磐石の如く、何者にも破られない。諸の菩薩の中に於て正直に方便を捨て、但無上道を説く——今迄は方便を混へて居つた、若し反對者があつて佛敎を攻撃せんとするならば、其處に攻撃の餘地があつたけれども、法華經に於ては最早やその餘地は無い。それ故に「菩薩は是の法を聞いて疑網皆已に除き」菩薩も今まで心に引かへつて居つた事、——引かへつて居つた事といふのはいろ／＼説き方が方便的になつて居るから、或は消極的に偏し或は未來觀に偏し、或は個人解脱に偏し、種々なることに偏して居る、故に種々なる問題に逢着する度に疑問が起る、丁度今日佛敎に對して種々なる批評があるが、それは佛敎を能く見て居らぬからであつて、その佛敎の或る一角を捉へて批評するが如き者は、法華經に來

つたならば皆解決のつくことであるから、菩薩はこの法を聴いてそれ等の疑ひがスツカリ無くなつた、一點も心に引かへるものが無くなつた、安全なる佛敎の知識、信解を得た譯である。千二百の羅漢は悉く亦當に作佛すべし、續いて是等の羅漢の人々も、この法華經が完全な教であるが故に救はれることになるのである。

二四、舍利弗當に知るべし、諸佛の法は是の如く、萬億の方便を以て宜きに隨つて法を説きたまふ、其の習學せざる者は此を曉了すること能はず。

この所は方便の教に囚はれてはいけないといふ事の根をさしたのて、「舍利弗當に知るべし」——諸佛の法を説かれる順序といふものは、どの佛が

れても始めは機根に當てがつて種々の方便を説くのであるが、併し後には法華經の如く眞實を説く順序になつて居る、その前に方便があり後に眞實を以て統一の終りを告げるといふ關係が判らなかつたならば駄目である。其の習學せざる者は此を曉了すること能はず、前に方便、後に眞實といふ關係が判らなければ、佛敎を領解することが出来ない。茲にも「萬億の方便」と言はれて居るが如くに、佛敎には實に方便が自在に應用されて居るが故に、それを能く考へて行かなければならぬ。尤もこの方便といふ事が一概に悪い事ではないけれども、方便に囚はれて眞實に達しない時には、それが弊を生むのである、何時も眞實と疏通を圖らんければ方便の役をしなくなつてしまふのである。

法華經はその一切經に應用した方便の種明しをし

て、さうして眞實の纏りをつけたのが法華經の教義であるから、之を開權顯實（權を開いて實を顯はす）と言ひ、或は開三顯一（三乗の教を開いて一乗の教を顯はす）と言ひ、分裂した佛敎を纏りをつけて統一する佛敎に見るやうにしたのが法華經だといふことになつて居る。それ故に佛の智慧に於ても統一を説き、誓願に於ても統一を説き、慈悲に於ても統一を説き、最後佛身の用きに於ても統一の本佛を擧げて、纏りをつけるのである。既に茲には智慧の統一慈悲の統一の内面的統一の部分で説きつゝある「諸佛の智慧は甚深無量」と言ひ、「諸佛の本誓願は云々」と云ひ、「是の衆生の爲の故に而も大悲心か起しき」といふやうな工合に、智慧なり慈悲なりの内面に於て同じい、絶對の智慧は一致する、絶對の慈悲は一致する、絶對の誓願は一致するといふやうに説き來

つて、最後佛身觀の上に於て又絶對の活動は一より出て多と分れる、多を收めて一に歸するといふ佛身觀上の統一を留めるのである。宗教は絶對といふことを理想した時に於ては、最高絶對の一に達せんければならぬものである、さういふ事は思想の順序として當然のことである、絶對といふ事は即ち一に歸さなければならぬ、それ故にいろ／＼の教に就いても佛敎が分裂的なものではない、その方便を開顯すれば皆眞實の一乗に歸着するといふことを教へたものであります。大體は方便品に於て開顯の事があつて、最後佛身の一大事のみが壽量品に於て顯れて來るのであります。

方便品は一通り法説上の説明であります、尙ほこの意味を徹底する爲に譬喻品に於て譬へを説き、化城喻品に於て又因縁を説いて、法譬因の三説を盡

大僧正本多日生師講述

那先比丘經通解

六は智慧、この六つを佛教の善事とするのである。佛
教は唯信仰だけとか道德だけと云ふものではない、
この六つを奨励する、之を佛法の要諦とするのであ
ると言つた。茲に誠信とあるのは信仰である、念善
とは道德である、智慧とあるのは即ち知識であるか
ら、信仰と道德と知識を包括し、更に孝順、精進、一
心等を包括したるもの、それが佛教であると答へた。
そこで是から後にこの六つの意義に就て問答をする
ことになるのであります。

王の言く、何等をか誠信と爲すもの
ぞ、那先の言く、誠信とは、人の疑を解
き、佛有るを信じ、經法を信じ、比丘
僧有るを信じ、羅漢道有るを信じ、今
世有るを信じ、後世有るを信じ、父母

に孝するを信じ、善を作さば善を得る
を信じ、惡を作さば惡を得るを信じ、
有るを信じ、是を以て後心便ち清淨にし
て五惡を去離す、何等の五々や、一に
は婬嫉、二には瞋怒、三には嗜臥、四に
は歌樂、五には疑なり、人は是の五惡を
去らざれば心意定まらず、是の五惡を
去らば心便ち清淨なり、那先の言く、
譬へば遮迦越王の如し、車馬人從屬度
して水をして濁惡ならしむ、過渡以去
に王渴して水を得て飲まんと欲す、王
に清水珠あり、水中に置くに水即ち清
むを爲、王便ち清水を得て之を飲まん、

那先の言く、人心に五惡有るは濁水の如し、佛の諸弟子生死の道を度脱し、人心清淨なるは珠の水を清ますが如し、人諸惡を却け誠信清淨なるは明月珠の如し。

前段に於て、那先比丘が六つの事を掲げて是が佛敎の綱領であると云ふ意味を申したので、それに對して王が一々に就て尋ねるのであります。而してこの一節は誠信の意義を明にして居るのである。

王が尋ねて言はれるには、今お話を六善事の中の誠信と云ふのはどう云ふ意味を指すのであるか。那先が答へるには、誠信とは「人の疑を解き、即ち種々の疑問を解決して、懷疑的精神を追拂つて、確信に導くことである。又その確信の内容は、唯信念と

言つても意義をなさぬが、何を信ずるか云へば、即ち「佛有るを信ず」、佛は目に見えない場合でもその本體は實在であり、常に人々を護つて居られるものである、その有難い意味合を信ずるのである。又釋迦牟尼佛がお説きになつた敎を信ずる、それは普通に法など云つて居るのとは違つて、誤りのない正しい意味合を敎へられて居るのであるから、其敎の主義に従うて行かなければならぬ。又三にはその敎の意味を世に傳へる人、即ち僧伽と云つて、敎の精神に合したる意味に於て世に敎化を垂るゝ者が僧伽である。僧伽と云ふのは和合と云ふことで、その仲間同士が和合することも意味して居るが、その敎に合することが第一の要點である。随つてこの僧伽の中には、或は「羅漢道あるを信ず」、羅漢と云ふのは殺賊と譯して居る、即ち煩惱の賊を殺して誤りのな

い聖者を指して居るのである。この羅漢道と云ふ言葉は、後年小乗の意味に考へますけれども、こゝではさうではないので、法華經に「眞に是れ阿羅漢なり」とある、即ち煩惱の賊を滅ぼす意味合であるから、必らずしも小乗を指すのではない、大乘に於ても、菩薩と云ふも佛と云ふも又羅漢と云ふも意味に於ては違はないのである。その意味から云へば、佛敎の敎に基いて煩惱の賊を滅ぼした、普通人より超越したる偉い人があると云ふ事を信ぜよ。又「今世あるを信じ後世あるを信ず」と云ふのは、この現在に於て爲したる仕事は必らず結果を生ずることを意味して居るのである。この世の中の事は、皆偶然であり、原因も結果もなくして、運命など云ふものは何處から吹いて來るか分らぬと云ふ風に考へるのはそれは間違ひである。この世に現れたる事も皆原因

があり、又この世に爲したる仕事も將來に結果を引くと云ふ、この因果律を信ずるのである。人間の生命の無限を信じ、又自分が爲したる行爲の善惡が結果を引くと云ふ關係を信じて行くこと、此等は皆宗教的事であるが、更に佛敎に於ては信仰と道德性を包含して居る。故に又一面には道德的な「父母に孝するを信じ」と云ふことがあるのである。子たるものは父母に孝を盡さなければならぬのである。孝は百行の基であつて一切の徳性を啓くのであるから、孝養は大切なものであると云ふ事の確信に立つ。それから又「善を作さば善を得るを信じ、惡を作さば惡を得るを信じ」と云ふのは「今世あるを信じ」と重複して居るやうであるけれども、是は直接に善因善果を説明して居るのである。善因を作れば善果を得る、惡因を作れば惡果を得る事を信ずる。

「有を信ず」と云ふのは、是は決して宇宙は虚無なるものではない、空なるものではない、實在なるものである。即ち諸法の常住を信じ、生命の常住を信ぜよと云ふのである。この世の中は烟の如きものであるとか夢の如きものであるとか、幻の如きものであるとか虚無であるとか云ふことになれば、信仰なり道徳なりは破壊されてしまふ。無と云ふも空と云ふも、皆是れ迷想を打破せんとするが爲であつて、それを結論の如く考へ、恰も虚無の如き思想に陥つたのは大なる謬見である。今この那先比丘の云ふ佛法の常住は、生命の實在諸法の常住を信ずる事を云つて居るのである。斯の如くにして種々なる事を確信するが爲にその信念に導かれて、それから以後に發作する所の精神は皆清淨になつて来る。信念はその心を淨からしむる本である。随つて五惡を除き去る

ことが出来る。「五惡」とは五戒より起る罪惡であつて、五慾と云ふも同じである、眼に對する色、耳に對する聲、鼻に對する香、舌に對する味、身體に對する觸覺、さう云ふ肉體から起る所の五つの劣慾に依つて罪惡を作るのであるが、吾々が信念を確立すれば、その以後に發作する精神は皆清淨になるから、五官の感覺が淨くなる、随つて五惡を去ることが出来る。その五惡とは何であるか、一には姪姪（男女間の色慾）、二には瞋怒（腹を立てること）、三には嗜臥（無暗に睡眠を貪ること）、四には歌樂（人の劣情を誘發するやうな歌樂）、五には疑（懷疑の精神）、この五つをこゝには指して居るのでありますが、之を去らなかつたならば「心意定まらず」て、淨い精神が確立しない。疑ふとか腹を立てることに依つて精神が動搖するから、この五惡を去れば随つて精神

の安定を得るのである。而してその心は清淨となるのである。斯く答へて那先は更にこの意義を明かにする爲に譬喩を擧げて説いたのである。

那先比丘が語を續けて言ふには、今申した意味合を領解し易いやうに譬を擧げてお話しすれば、「遮伽越王の如し」、是は義に強い王様が戰に臨むが如きものである。「車馬人從」とは軍用の車馬、それに從ふ所の人足である。其等が河を渡るには我れ先と爭うて渡るから、爲に水が濁る。その時に王様が咽喉が渴いて水が飲みたいと思つて、それが自然に清むのを待つて居れば、次から次と渡るから容易に清まなう。その時に「王に清水珠あり」、水の濁りを清ます珠があれば、その珠を水の中に入れることに依つて、珠の威徳に依つて水が清み、王はその清んだ水を飲むことが出来るであらう。恰度人間の心の中には、

車馬人從が國度して水を濁すやうに、煩惱の爲に始終心を掻き紊されて居るけれども、その場合に信仰に依つて行くならば心の濁りは清むのである。五惡は心を濁す、それを佛の弟子達が生死流轉の迷を清うてその心を淨くするのは、恰も「珠の水を清すが如し」である。信仰は人間の心の濁れるを清す珠である、種々なる悪い事を却けて、さうしてそこに誠信の清淨を得るのは正に「明月珠の如し」である。恰度優しい淨い光を放つ月のやうな珠が人間の心の中に輝いて居るやうなものである。一方には珠の水を清すが如く心の濁りを去り、一方には明月珠の如く心の暗を破つて光を與へると云ふ意味に於て譬を擧げて居るのである。

この誠信即ち宗教の信仰が、人間の精神を淨め、随つて行ひを善良ならしめるのである。今の狹隘な

る宗教の信仰、唯一に淨土宗などて云ふやうに、阿彌陀様は有難いと思つて居れば道徳は要らぬと云ふのではない、單に信心して居れば道徳は構はないと云ふのは全く佛教の正當教義ではない。又佛教に依らない日本の道徳學者、即ち儒者とか今日の教育家は、宗教の信仰を否定して唯親に孝行さへして居れば宜いと言つて居るけれども、そこに根本的に因果律を信ずるこの佛教の宗教的なる精神を確定しなければどうしても清水珠と云ふものは出て來ない。それであるから佛教の信仰は、今の狹隘なる誤れる信仰をも認めないし、又宗教の信仰を否定して居る淺薄なる道徳も認めない、その兩方の缺點を去つて良い所を擧げ、佛教とは斯う云ふものだとならば比丘は説いたのであります。日蓮聖人が四條金吾に送られた文の中に、主の御爲にも法華經の御爲にも、世

間の心根も吉かりけり、吉かりけりと鎌倉の人々の口々にうたはれ給へ」と言つて居る。主人に對する忠節も、法華經に對する信仰も一般の道徳的觀念も併せて行ふのが法華行者であると言つたのは、那先比丘の言と一致して居るのであります。

王復那先に問ふ、精進誠信とは云何、那先の言く、誠信を行ずれば便ち度世の道を得ん、譬へば山上の大雨の如し、其の水下流廣大にして兩邊の人俱に水の淺深を知らず、畏れて敢て前まず、若し遠方より人の來るあり、水を視て隠かに水の廣狹淺深を知り、自ら力勞を知り、能く水に入つて便ち過度する

事を得て去らば、兩邊の人衆便ち後に隨つて渡り去らむ、佛の諸弟子も是の如し、善心に精進して道を得るも是の如し、佛經に説いて言ふ、人に誠信の心有れば自ら得度すべし、世人能く自ら制止すれば五所の欲を却く、人自ら身の苦惱を知らば能く自ら度脱せん、人皆智慧を以て其の道徳を成ず。

この一段は誠信に就て更に語り續けたのであつて、獨善主義の考てはいかぬと云ふ事を説いたのである。能く佛教を攻撃する人は、佛教は自分の心を淨くするも、社會の爲に盡すことを考へない。自分が地獄に往くのを恐れ、自分さへ淨土に行けば

社會國家は野となれ山となれと云ふ教であると言つて非難した。それは淨土宗のやうな狹隘な信仰に對しては或は當つて居るかも知らぬが、佛教の根本の教には左様な意味は無いのである。菩薩行と云ふのは、言ふまでもなく自分だけ善ければ宜いと云ふのではなくして、その意味は到る處に力説してある。そこでこゝには誠信は單に自己の爲にするのではなく、遍く他を利益するのである。それを譬に寄せて説いて、個人の徳を修めるのと、團體の向上を促して行くとの關係が明されて居る、最も大切な要文である。

王が重ねて那先に問ふて言はれるには、「精進誠信とは云何」、唯だボンヤリした誠信でなしに、熱烈にその誠信を貫徹して行くことになればどう云ふ意味を持つかと問はれた。那先比丘は答へて、誠信を

實行すれば、その信念の進み行く時に「度世の道」と云つて、この世の中を濟度する道を得るのである。譬へて言へば山に大雨が降つたやうなものである、その水が次第に流れて、それが段々溜つて河になる、兩方の岸の人は向ふに渡らんければならぬけれども、激流であつて浅いか深いか分らぬ故に、恐れを懷いて渡らうとしない。時に遠方から人が來てこの水を見て、この邊が浅いか深いか或は廣いか狭いかを能く知つて、非常な勇を鼓して、その人が先に立つて渡つて見せる、お前等も斯う云ふ風にすれば何も心配はない、溺れることはない、確かにこの水は渡れると云ふ事を實地にやつて見せた、兩側に居つた人は、成程あれなら心配はないと云ふので河を渡る事になる。一人が範を示し多くの人をしてそれに倣はしめる事に依つて、世を度することが出来る。

來るのである。さう云ふ譯で普通の人よりは淨い道に立ち、善き仕事をする、罪惡を犯し煩悶するやうな危険な生活をしないで、罪惡を犯さず、苦痛に襲はれざる生活を遂げて、その模範を示したならば、外の人もその通りやつて幸福を得るではないか。佛經に説いて言ふ、是は那先比丘が佛の説を引證したのである。「人に誠信の心有れば自ら得度すべし」その人に誠信の心があれば罪惡と苦痛とを度り得るのである。「世人能く自ら制止すれば五所の欲を却く」、所謂自制心を以て、妄りに起つて來る低き慾望を抑へて、自分の淨い精神に依つて導くことになれば、五つの慾を却けることが出来る。この「五所の欲」とは眼耳鼻舌身より起る、色聲香味觸の五感の五つである。自分の身に斯の如き苦みがある、是は斯うして

本多日生祝下著書一覽

○法華經の心髓

金壹圓六拾錢

○日蓮主義初步

金七拾錢

○日蓮主義

金壹圓五拾錢

○修養と日蓮主義

金壹圓五拾錢 (品切れ)

○國民道徳と日蓮主義

金壹圓五拾錢

○日蓮聖人正傳

金貳圓貳拾錢

○日蓮主義綱要

金貳圓貳拾錢 (品切れ)

○日蓮聖人の感激

金貳圓貳拾錢 (品切れ)

○日蓮主義の運用

金貳圓五拾錢

○東洋文明の權威

金貳圓貳拾錢

○國民教化

金貳圓貳拾錢

○法華經の伴

金貳圓貳拾錢

○思想問題の歸結と法華經

金貳圓

○聖訓要義

各卷壹圓貳圓貳拾錢

○開目抄詳解

上卷一部金貳圓八拾錢

○聖語錄

金貳圓八拾錢

○優婆塞戒經通解

金八拾五錢

○大乘本生心地觀經通解

金八拾五錢

○法華經講義

上卷下卷各一部金貳圓四拾錢
送料一部金拾八錢

○大藏經要義

一部金壹圓八拾錢十一卷迄既刊
送料一部金十八錢半前金送料不要

○法華經要文

並製金壹拾錢送料一部金貳錢
上製金五拾錢送料一部金貳錢

○佛教信仰の正統

金壹圓參拾錢郵稅六錢

以上購讀希望の方は左記へ申込をるべし

東京市外品川町妙國寺内
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

| 價定一統 | | | |
|------|---|----|-------|
| 一 | 冊 | 金 | 拾錢 |
| 一 | 年 | 金 | 參圓參拾錢 |
| | | 送料 | 共 |

| 告 | 廣 | 一 | 頁 | 金 | 拾錢 |
|-------|---|-----|---|---|----|
| 牛 | 頁 | 金 | 六 | 圓 | |
| 四分ノ一頁 | 金 | 參圓半 | | | |
| 事の金前 | | | | | |

大正十一年八月廿七日印刷納本
大正十一年九月一日發行發行所 編輯所
東京府荏原郡品川町品川四百十二番地
東京府荏原郡品川町品川四百十二番地
東京府荏原郡品川町品川四百十二番地
東京府荏原郡品川町品川四百十二番地編輯所 統一行所
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常樂寺内
統一行所
振替東京五一〇七一番
編輯所



| | | |
|---------------|------|------|
| 法華三聖 | 文學博士 | 本多日治 |
| 日本文化と外國關係(承前) | 山根正東 | |
| 實學(續) | 森川日修 | |
| 淨土教と厭世思想(續) | 井村日威 | |
| 主義より見たる無量義經 | 吉田昂生 | |
| はんところ | | |
| 事報道 | | |
| 法華經要文講義(續) | 本多日生 | |
| 那先比丘經通解(續) | 本多日生 | |